年中行事の動態的把握のための基盤作成
複数資料の並列化と階層化に向けて

Creating a Basis for a Dynamic Grasp of Annual Events:
For Organizing Multiple Resources by Hierarchy and Concurrency

川村清志・葉山　茂

KAWAMURA Kiyoshi and HAYAMA Shigeru

はじめに
❶調査地と尾形家の概要
❷年中行事の資料
❸行事の変遷とその厚い記述に向けて
❹尾形栄一日記に見る年中行事
おわりに

［論文要旨］

本稿は，文化財レスキューで見出された昭和初期の日記資料を端緒として，複数資料を用いた民俗文化の編年的記述の再構成に必要な手続きを提示することを目的とする。以下では特定地域の複数の文献資料を重ね合わせることで，各々の資料の特質を理解しつつ，データの階層化と並列化を促進したいと考えている。

これまで市町村や都道府県など広範囲での周年の行事は把握されており，各地の博物館・資料館の報告書や自治体史のレベルで，年中行事に関するデータは蓄積されてきた。これら特定の時代に特定の地域で収集された資料は，他の資料との比較や関連付けによって初めて意味をなす。各地域に蓄積された大量のデータについても，総合的な運用に向けた議論が行われてしかるべきである。しかし，それらの資料を単純に横並びにすることが，必ずしも年中行事の全体的な把握につながるわけではない。これらの資料には編者の目的や関心，あるいは調査対象の広がりによって種々の偏りや精粗が見られるからである。

そこで本論は，宮城県気仙沼市小々汐地域における年中行事に関する調査報告事例を対象として，報告間の偏りを整序するための並列化と階層化に向けての課題を提示し，具体的な作業工程を例示する。この作業から得られるデータは，地域の民俗文化の継起的な変容過程についての基礎資料となるだろう。民俗文化における変化の多寡，具体的な変化の内実，変化を促す諸要因を検証するための資料としても重要である。

【キーワード】年中行事，日記資料，民俗誌，文化財レスキュー，並列化，階層化

はじめに

本稿は，文化財レスキューで見出された昭和初期の日記資料を端緒として，複数資料を用いた民俗文化の編年的記述の再構成に必要な手続きを提示することを目的とする。以下では特定地域の複数の文献資料を重ね合わせることで，各々の資料の特質を理解しつつ，データの階層化と並列化を促進したいと考えている。この作業から得られるデータは，地域の民俗文化の継起的な変容過程についての基礎資料となるだろう。民俗文化における変化の多寡，具体的な変化の内実，変化を促す諸要因を検証するための資料としても重要である。その具体的な事例として本稿は，気仙沼市小々汐地域における年中行事に関する事例を対象とすることにしたい。

これまで年中行事について民俗学では，様々な議論が行われてきた。柳田國男の「民間暦小考」［柳田 1999］や折口信夫の「年中行事」［折口 1955］を嚆矢として，行事を周年的な営みの中で構造的に捉えようとする視点が民俗学のなかに成立した。こうして，体系化される以前の暦と行事との関係が説かれ，1年両分制についての仮説と検証が展開していくことになる。その後，年中行事の構造的な理解は，多くの研究者に引き継がれていく。年中行事は，一方では年間の生業暦―とりわけ農業において顕著であるが―のサイクルと並行して論じられ，他方ではそれらを担う集団や社会構造との関連性のもとに探求された。これらの研究史が抱える課題については稿を改めて論じることになるだろう。

ここで話題としたいのは，研究論文はもちろん，調査報告のレベルで行われてきた基礎資料の精粗や偏りについての問題である。すでに市町村や都道府県などの広範囲での周年の行事は把握されている。それ以外にも，各地の博物館資料館の報告書や自治体史のレベルで，年中行事に関するデータは蓄積されてきた。特定の時代に特定の地域で収集された資料は，他の資料との比較や関連付けによって初めて意味をなす。各地域に蓄積された大量のデータについても，総合的な運用に向けた議論が行われてしかるべきである。しかし，それらの資料を単純に横並びにすることが，必ずしも年中行事の全体的な把握につながるわけではないことを，以下のケーススタディから明らかにしたいと考える。

本論では，気仙沼市内の小々汐地区を中心に扱うが，この地域では過去に複数回に渡って現地調査が行われ，報告書が作成されてきた。しかし，個々の報告の年中行事記述は，各々の関心や対象の射程にズレがある。本論では，これらの報告書の記述を平準化した上で，現地で見出された一次資料を交えて総合的な検証を行うことを目的としている。

そこで本論は以下のような手順を取ることになる。まず❶では，調査地と一次資料である日記資料の概略を示す。❷では，戦後における当該地域についての調査報告を整理し，各々の資料から浮かび上がってきた年中行事に関する記述の特質を整理する。これは日記資料に記された年中行事に関する記載を抽出するための指針に用いることになる。ただし，これらの資料には編者の目的や関心，あるいは調査対象の広がりによって種々の偏りや精粗が見られる。❸では報告間の偏りを整序するために，それらの並列化と階層化に向けての課題を提示し，具体的な作業工程を例示する。そのうえで❹では，日記資料から年中行事を読み取り，昭和初期から現在に至る時系列的な行事の推

移を捉えなおす作業を行いたいと考える。

❶……調査地と尾形家の概要

本稿では，宮城県気仙沼市小々汐地区における年中行事の動態を事例として検証する。検証の端緒となる資料は，小々汐地区の総本家とされる尾形家（屋号は大家（オオイ））から見つかった昭和初期の日記である。尾形家は，東日本大震災で大きな被害を受けた。家族こそ無事に避難したものの，築200年になろうとしていた家屋は流出し，多くの家財が失われた。

小々汐は気仙沼港の向かい側，気仙沼湾の東岸に位置する。市街地から小々汐へは，一端鹿折地区まで北上して浪板橋を渡り，約3キロの道を南下する。道沿いには入り組んだ湾に沿って浪板，大浦，小々汐といった集落が点在する。さらに道なりに南下すると梶ヶ浦，鶴ヶ浦といった集落が続く。浪板を除くこれらの集落は四ヶ浜と総称されてきた。四ヶ浜は鹿折川の川上に位置する鹿折八幡神社の祭礼圏であり，小々汐内にあった浦島小学校の通学圏でもある。

震災前，小々汐は世帯数54戸，人口140名程の集落だった。小々汐地区の世帯の大半は尾形姓のため，各々の家は屋号で呼ばれることが多い。総本家とされるオオイは，近世の初期から小々汐の社会的文化的な中核を担ってきた。伝承や史料上では，近世以前にさかのぼる家系を有し，地域の肝煎を務めるとともに漁業，農業などの生業経営でも指導的な立場にあった。

当初，オオイの屋敷は，現在よりも南に丘を一つ越えた場所にあった。海での仕事が盛んになったために現在の場所に移り住んだと考えられる。かつての屋敷跡はタクバと呼ばれている。新しい家屋は1810（文化7）年に普請され，築200年近い歴史を有していた。2011年の大津波で被災した尾形家住宅である。家屋は約100メートル，小々汐内を流れて大破した。被災後2ヶ月弱で，国立歴史民俗博物館の職員が中心となり，尾形家住宅や小々汐集落を対象に，生活用具や文書などの生活に関わる物質文化の保全活動に携わることになる。(1)

紹介する日記資料は，2012年の段階で小々汐でのレスキュー作業が進むなかで確認された【写真1】。これらの日記類は，レスキューしたタンスの棚の中から見つかった。しかし，初期の混乱した状況下での作業のため，どのタンスのどの棚から見出されたものかは明らかになっていない。後に尾形家の家族に確認しても，それらの日記の所在はすでに知られていなかった。

日記は，現当主の尾形健氏にとっては父方の叔父にあたる尾形栄一氏によって記された。栄一氏は，健氏の父で前当主の忠行氏の弟にあたる。日記には高等小学校の最終年度にあたる1932（昭和7）年度とその翌年の生活がほぼ，毎日記録されている。この日記には当時10代半ばだった栄一氏が経験したオオイの生業や年中行事，人生儀礼や民俗信仰，それらの様々な営みに関わる家族や親族たちの様子が簡潔に記録されている。時にはあまりに簡潔な記述

写真1　尾形栄一日記表紙（1933年）

のために，それらが年中行事に関連するものか，判断に迷うこともあった。

この日記を読み解くために次章では，これまで小々汐とその近隣で実施された調査報告を参照し，それぞれの資料の特質と課題を明らかにしていく。幸いにして小々汐では，戦後の早い時期から高度経済成長期，さらに東日本大震災以前にかけて，繰り返しインタビューを中心とした現地調査が行われている。これらの資料から年中行事に関する項目を抽出し，日記を読み解く際の指針に利用したいと考える。

なお日記の日時は，全て新暦で記されている。対して当時の行事の多くは旧暦を遵守していたことがのちに明らかになる。本論でも，日記に登場する順番に行事を説明していくため，実際よりも一月前後，遡った行事から紹介することになる。結果的にではあるが，この順序は，次節で紹介する民俗報告が説明する順序に近いものとなっている。

❷……年中行事の資料

既述したように尾形家を含めた小々汐の年中行事については，戦後から比較的近年まで複数の調査報告がなされてきた。これまでの報告を概観しながら，年中行事の重層的な構造を解き明かしていくことにしたい。

ここで紹介する資料は，1959年に竹内利美らによってまとめられた『漁村と新生活―気仙沼湾地区基礎調査―』［竹内編 1959］，1984年に出版された『三陸沿岸の漁業と漁業習俗』［東北歴史資料館編 1984］のなかの「宮城県気仙沼市四ヶ浜」の章，2014年に発表された『小々汐仁屋の年中行事』［川島 2014］，そして小池淳一による「東日本大震災と文化資源―気仙沼市小々汐地区から―」［小池 2013］である。これらの資料から，戦後のオオイを中心とした小々汐の年中行事の変遷過程を見通すことができると考えている。

『漁村と新生活―気仙沼湾地区基礎調査―』は戦後の早い時期の資料として，1950年代の終わりに刊行されている。この報告書は，小々汐を含めた四ヶ浜漁村の社会形態を報告している。ただし地域内におけるオオイの重要性に注目しており，その社会的役割や年中行事，宗教儀礼についても紹介している。その中で年中行事の概要は表1の通りである。記述は年末の「煤払」から始まり，正月，小正月へと続く。行事の概要は非常に短い。日時に記されていないものとして，「観音講」や「金比羅講」があったことも紹介されている。盆と正月について，少し詳細な記録があるが，基本的にはこの表を越えるものではない。その意味では1年間の行事についての概略的な紹介に留まっているといえる。

あらかじめ指摘しておきたいのは，この一覧にはいくつか疑問点があることである。まず，彼岸の中日が，「2月中」となっている。これは日記と照らし合わせても，また，この後の報告と重ねても時期的に無理がある。おそらく，これは3月中の誤りだろう。もう1点，事例として疑問視されるのは，5月16日の「おしら様拝み」の記載である。この日にオシラ遊ばせ，あるいはおしら様拝みがあったという記述は，日記にも登場しない。気仙沼市史によれば，気仙沼全体でもおしら様オガミは1，3，9月の16日のいずれかと考えられている［気仙沼市史編さん委員会編 1994］。この日にオシラサマに関する行事があったかどうかは，現時点ではかなり疑問である。

表1　資料①記載行事一覧

月	日	年中行事
1	1	年始。午前中は尾形同族全戸の男（主人）が参集し，午後は主婦の会合である。
1	11	ノウハダテ（農始め）。特定分家（六戸）が未明に参集し，初仕事をし，朝食を済して帰る。
1	16	仏おがみ。午前中は男。午後は女の集りで，本家の「オシラサマ」をおがむ。
2		**彼岸中日。先祖おがみに男が参集。**
3	3	節供礼。男のみ。
3	**16**	**オシラサマおがみ。女のみ。**
5	5	御節供。男。
5	16	オシラサマおがみ。女。
7	13	盆。おみやげの贈答あり。女達。 夜，男連中が仏おがみに参集。
7	14	男の盆礼。
7	16	男，仏おがみに参集。
9	16	オシラサマおがみ。女。
12	20	煤払。特定の分家（6戸）から男女各一名が手伝に参集。男は煤払。女は台所道具の清掃に当る。 終了して「一別家」のものが豆まきをする。
12	30	御歳暮，集落内各戸の男が暮の挨拶に参集。贈答がある。 これ以前に，特定分家が寄り，男は注連つくり，女は餅つきをし，その餅つきも特定分家二戸の分担である。

以上の点を留意しつつも，この表からはいくつかの興味深い点が読み取れる。まず，この行事表は，全てオオイに関わる行事が記されていることである。そこで記述の中心となるのは，オオイと別家（分家）との間で執り行われる労働奉仕や贈与の形態である。すなわち，「煤払」や「ノウハダテ」は，別家の者たちがオオイに赴き，労働力を提供する行事である。それに対して新年のお歳暮や盆の贈答は，主には，オオイから別家への贈答である。ただ贈答に関しては，必ずしもオオイからの一方向的なものに限られたものとは言えないかもしれない。

次に男性と女性の役割分担が比較的明確に示されていることである。年始の集いに始まり，小正月以後は，繰り返し男性が「仏おがみ」，女性が「おしらおがみ」に参加することが記されている。また，オオイの重要な行事には，特定の別家が存在し，各々の役割が決まっていたことも記されている。

ただし，この行事では盆や正月の細かな行事の内容は示されておらず，小正月については記載もない。また，後の資料や聞き取りには記録される「エビス講」や「お天王様」などの行事についても記されていない。このような記述の偏りは，調査者の主要な関心がどこにあったのかを暗示するものかもしれない。

次に『三陸沿岸の漁業と漁業習俗』のなかの「宮城県気仙沼市四ヶ浜」の章にも，小々汐をはじめとする四ヶ浜の漁業と生活習俗についての記載がある（以下資料②）。この報告書は，生業，とりわけ漁業を中心に記録しているが，それらと関連して，通過儀礼や年中行事についてもかなり詳細な記述が見られる［東北歴史資料館編 1984］。

この本は 1984 年の出版だが，「宮城県気仙沼市四ヶ浜」の章末には，このデータが「昭和 55 年 8 月より 10 月にわたって行われ」た調査に基づくことが記されている。また，話者として「小々汐の尾形正志，尾形栄七，尾形忠行，梶ヶ浦の小松勝実の諸氏の協力を得」たことも記されている［東北歴史資料館編 1984:114］。記述の多くは小々汐の事例であり，しかも，忠行氏を始めとしたオオイとその別家が主なインフォーマントであったことがわかる。また，調査が行われた時点から考慮すると，ここでの年中行事は，概ね 1960 年代から 70 年代にかけてのものであることが推測される。

この報告でも正月前の準備段階から年中行事が始まっている。行事を大きく15に分けているが，その多くは月ごとの分節化である（表2参照）。例外として⑴正月の準備，⑵年取り，⑶正月，⑷小正月と年末年始の行事が集中している時期を細分化している。この報告には，日記を含めた他の資料には見られない行事がいくつか記されている。その一つが，4月8日の大島の田尻にある薬師堂の祭日についての記述である。大島は，気仙沼湾の南方に浮かぶ島だが，小々汐を含めた四ケ浜とは狭い所で100メートルほどの距離しかない。船での行き来も盛んで，大島にある神社の祭礼にお参りする人たちも多かったようである。この祭日にも，「アズキを入れたヨモギ餅をついて，漁に行く途中に立ち寄って参詣する」［東北歴史資料館編1984:113］とされた。また，かつては，この日の「宵祭りに男女の乱交の風が」あり，「近在の浦浜の者たちが俵端を持って船で渡り，そのために近くの麦畑が平らになるほどであった」［東北歴史資料館編1984:113］とも記されている。

また，10月の10日前後には，「ニワバライ」があった。これは，オオイの稲刈りの後に，手伝いをした家が，「オオエでボタ餅のご馳走を受ける」ことである。さらに11月15日は，「油締め」の日とされた。行事の名前は次の資料にも出てくるが，内容が記されているのはこの報告だけである。この日に「気仙沼古町の油屋にツバキの実を締めに行く。またこの日をオセヂといって，ダンゴを作って神棚に供える」［東北歴史資料館編1984:114］とある。

行事内容の細かな部分で，この報告にだけ見られるものも多い。例えば，小正月の行事に「かせどり」が行われたと報告されている。「カセドリといって頭巾をかぶって顔を隠し鳴り物を鳴らし，家々を回ってご祝儀の金や餅をもら」［東北歴史資料館編1984:112］うとされる。カセドリは厄年の者が務めることになっており，そのことが厄払いになると考えられていた。ただし「カセドリ」については小々汐ではなく，梶ガ浦の行事の可能性がある。既に見たように話者に梶ヶ浦の小松勝実氏の名が見えるからである。

正月の元朝参りについての詳細な内容もこの報告にだけ見られる。

年男が独り早朝に起きて次の順に社寺を巡拝して回る。屋敷内の氏神さま―金比羅さま（小々汐）―弁天さま（大浦）―お不動さま（浪板）―子安観音（同）―山の神さま（同）―飯網さま（同）―八幡神（鹿折）―興福寺（同）―三峰さま（小々汐）―恵比須さま（同）―天王さま（同）―熊野神社（梶ヶ浦）―御岳神社（鶴ヶ浦）。回り終わって家に帰るのは昼ごろになる。八幡神社と興福寺には年始の金を納め，他の神々には米を供える［東北歴史資料館編1984:111］。

この報告は，お参りの順からいっても小々汐の行事であることは間違いない。元朝参りについては，❹で改めて検討したいが，一つ気になるのは，小々汐内で参ったとされる「恵比寿様」の存在である。その他の小祠は全て把握されているが，恵比寿に関しては現時点では，確認することができていない。

更に2014年に刊行されたオオイの第一別家（分家）の仁屋の年中行事とそこで撮影された当時の画像資料を参照する［川島2014］。紹介される資料の多くは，1980年代から90年代のはじめに地元の民俗学者，川島秀一が収集した事例報告である（以下資料③）。この報告書は，小々汐の尾形家の別家である仁屋の事例が中心となるが，季節の節目となる行事では，しばしば仁屋の当主がオオイ

表2　資料②記載行事一覧

章立て	項目	行事内容
(1)正月の準備	スス払い	オオエのスス払いが12月20日なので，他の家ではその前後の日にする。 スス払いのほうきに使うカススボリノキ（萩）を用いる。この夜には田作りの魔除けを作り、豆まきをし，オハギなどを作って食べる。
		オオエのスス払いは，分家の7軒から2名ずつ手伝いに出る。
	オセツヅキ	12月13日から23日までの間に正月の用意。13日をオセツヅキといって，正月用の米や餅米をこの日に少々でも必ず用意する。
	お門松迎え	12月25日か26日に，山へ行って門松を迎えて来る。
	餅つき	12月28日。「一夜餅はつくな」といって，この日ひと臼でも餅をつき，他日もう1度餅つきをする。餅は白餅・アズキ餅・ヨモギ餅・豆餅などをつく。お供えの餅は丸い白餅を2個重ね15組作る。
	年越しマチ	12月28日と30日は，“年越しマチ”といって気仙沼へ正月用品の買い物に出かける。このとき必ず買うものは，命・箕・若水桶・ひしゃく・箸・椀などである。
(2)年取り	年男	年男には家督がなる。
	門松	門松は年越しの日に立てる。デイとオカミの間の柱にオシヌグイという松の長板をかける。
	正月飾りと供物	オカミの四方の長押にシメナワを張り渡し神棚にもシメナワを張り，7枚のホシノダマ（宝珠の玉を書いた紙），12組の供え餅を供える。松飾りは氏神さまとフナダマサマに飾り，カマガミサマとフナダマサマにもお供え餅を供える。井戸には幣束を立て，臼に被せた若水桶にはシメナワを飾る。
		オカミの中央の柱に寵神・金比羅・天照皇大神の掛軸を飾り，台を置いて供え餅・お神酒・頭付きの魚を供える。膳は5つ整え，お歳の神さま（後出）・フナダマサマ・氏神さま・恵比須さま・大黒さまに供えるが，まず最初に門松に供えて拝む。
	お歳の神さま	皮を剥いだ松の枝にワラを3段にほうきのように結び，縄の結び目に上段から1本，2本，3本と幣束を刺し，神棚のオマブリ（お守りのお札）を貼ってある前に立てる。小正月に下ろす。
	オミダマサマ	年越しマチで買った箕に，アズキと白餅を合せた3個の供え餅と幣束・ロウソクを載せ仏壇の前に供える。元日から4日まで朝晩飯を箕の上に盛り加えて供え，4日をオミダマサマオロシといって箕を下げる。その間仏壇には線香を供えない。下ろした飯はホスコ（干飯）にする。
	臼を伏せる	年越しの晩にニワに供え餅を下にして臼を伏せ，シメナワを回してその上に若水桶を置く。 臼は6日に起こし，供え餅を臼に入れて杵でつく真似だけをして再び伏せる。20日に起こす。回したシメナワは15日にはずして納める。
	年取りの晩	白いご飯に焼き魚の“年越し魚”でお神酒を飲む。「ヨソウベエの年越し日だ，お神酒を飲んで夜更しする。早く寝ると年寄るから」といい，炉に正月用にと干しておいた木の根などをどんどん焚く。
	オオエへの歳暮	年越しの晩，金や砂糖などを持ってお歳暮にオオエに行き，酒などをご馳走になって帰る。
(3)正月	元朝参り	年男が独り早朝に起きて社寺を巡拝して回る。八幡神社と興福寺には年始の金を納め，他の神々には米を供える。
	オオエへの年始	元日の朝，集落内の全戸がオオエにご年始に行き，酒が振舞われる。
	若水	年男が3ヶ日，5，7，11，15，20　晦日，2月の3ガ日に，「アキの方からお年男が若水を汲みにきました。何をつるつる福の水をつりあげる」と唱えて汲み，伏せた臼の上に若水桶を置き，その水で朝晩のご飯を炊く。
	年始	オオエのテマケ（親類）に，6寸×3寸の薄い餅を3-5枚紙に包み，「ご年始」と書き水引きを結んで“オバヤシ餅”といって配る。
	初夢	元日の夜の夢を初夢という。「夢は裏表」といい，婚礼などの夢は悪い夢とされている。
	乗りそめ	2日に“乗りそめ”といって漁の仕そめをし，獲った魚を神棚に供え，下ろして初売りをする。
		3日は不浄日とされ，4日とともに漁をしない日にされているが，乗りそめに出漁すればこれらの日に漁をしてもよい。
	買いそめ	2日。気仙沼に行って買いそめをする。白い物をはじめて買う日とされ，白飴を買ってオミダマサマに供え．オオエへの土産にする。この後15日まで白い物を買ってはならないとされ，漁に使うものでも白い物は一部に墨を塗って買うという。
	三ヶ日の食べ物	3ヶ日は神に雑煮を供える。また3カ日の内にトロロを食べると悪病にかからないという。
	若木迎え	6日。初めて山へ入る日とされ，幣束と餅を持って山へ行き，ナラと栗の木を2束伐ってくる。迎えた若木で七草ガユと“松納めガユ”を炊く。
	七草	7日朝。年男が若水を汲み，火を起し，唱え言とともに大麦・小麦・大根・ヨモギ・セリ・菜などの七草をたたく。その後年男は幣束を持って天王さまにお参りに行く。なお「七草はカテの始まり」として，七草前にはカテを入れた食物を食べない。
	ノウハダテ	11日の午前0時に，分家の7軒がオオエに集まり，1人4-6本のモドツ（荷縄）をない，縄に松の枝を刺して梁に掛ける。アサバミ（朝食前の食事）に供え餅を下るして焼き，きなこ餅にしてご馳走になる。午前8時ごろ朝ご飯を食べて帰る。家に帰って自家のモドツをなう。

(4)小正月	小正月の餅つき	13日と14日に餅つきをする。白餅・ズキ餅・豆餅をつき，お供え餅を新しく作って取り替える。
	マユダマ	11日に伐っておいたミズヒラの木に，14日についた餅を飾ってマユダマを作る。
	松納め	15日朝。アズキガユを炊き“松納めガユ”といって神棚に供え，その後に門松の松をはずし，シメナワなどと一緒に氏神さまに納める。門松の柱にはこの後「さあさ喜ぶ」といって笹とコンブを松に替えて飾る。コンブといわれる物はいわゆるコンブではなくニワトコの枝である。門松の柱は後にハセの長木に使用される。
	海の神を祭る	元日と15日の朝。船着場の船を繋ぐために常設されているイカリをゾウゲエアデといい，このイカリに向かって海にお神酒を注ぎ，南を向いて遥拝する。「島々弁天，崎々明神」といって，島や崎には神が祀られている。この日フナダマサマに供え餅を供える。
	物真似	15日に行われるアワヘボ・カセドリ・大漁祝い・ナマコビキ・成り木責めなどの行事を“物真似”という。
	アワヘボ	カツノキを7寸ぐらいに切って，皮を削ったもの30本を栗の木に下げ，15日の朝庭先に立て，2月朔日までそのまま立てておき，その後に倒す。
	カセドリ	15日夜。厄年の者(別項参照)は，カセドリといって頭巾をかぶって顔を隠し鳴り物を鳴らし，家々を回ってご祝儀の金や餅をもらい，厄払いをして歩く。
	大漁物真似	15日夜。オオエにイワシ網漁の乗組員20人が訪れ，大漁を祝う。
		また，この日子どもたちがオオエのオシルシ（大漁旗）を借りて担ぎ，「ヘヤー，ヘヤー」と大漁節を歌って全戸を回り，銭・餅・柿などのご祝儀をもらって歩く。この行事も“大漁物真似”という。
	御崎さま参り	15日に厄年の者が揃って，唐桑の御綺さまにお参りをする。
	烏追い	16日の朝、鳥追いをする。鳥追いをした者は「苗代に鳥が入る」といって，炉の中に入れない。
	20日のヤイト	20日に“20日のヤイト”といって，シメナワに下げたカキダレをなって火をつけ，その日で家内中の体を清める，留守をしている者はその者の着物を清める。この日、ヤイトガユといってアズキガユを食べる。
	お恵比須さま	20日はお恵比須さまの日で，イワシ網漁の乗組員がオオエに集まり，祝い事をする。
	ツタコの年越し	正月の晦日を“ツタコの年越し"といい，15日に門松に飾った笹とコンブを，杉の葉とツタウルシに替える。この杉の葉とツタウルシは「正月過ぎて2月に伝わる」といい，2月9日まで飾る。
(5) 2月	ツタコの正月	朔日を“ツタコの正月”といい，男子の42歳，女子の33歳，88歳の者は，テマケの人々を招いて年祝いの振舞いをする。このとき厄年の者は，赤いものを着たり首に巻いたりする。
(6) 3月	ノウズラダンゴ	16日。1升マスにノウズラダンゴと呼ばれるダンゴを16個入れ，神棚に供える。
	オシラサマ拝み	オオエにはオシラサマが祀られている。正月にはオセツと呼ばれる新しい布が着せられ．正月・3月・9月の16日に“オシラサマ拝み”といって分家の女の人たちが拝みに来る。
	春の彼岸	中日に餅を持って墓参りをする。
(7) 4月	お薬師様	8日。大島田尻にある薬師堂の祭日で，アズキを入れたヨモギ餅をついて，漁に行く途中に立ち寄って参詣する。
	トリの口祭り	苗代に種モミを下ろすと，“トリの口祭り”といって，ヤゴメ（焼き米）を袋に入れて竹に挟み，苗代の水口に立てる。
(8) 5月	節供	5日。軒にショウブとヨモギを挿し，ショウブ湯をたてて入り，ショウブ酒を飲む。庭先に織旗を立てる。織旗は，上から大漁旗・真鯉・緋鯉の順にする。
	田植え	オソドメ（早乙女）の人数分の苗を用意しワラダ（ワラの輪）にワカメを巻き，それを田の神としてその上に用意した苗を置き，供え物をして水口に祭る。田植えはこの苗から植え始める。
		オオエの田植えは分家がすべての作業に手伝い，田植えは全戸の女衆が手伝い。オサナブリは集落の田植えが全部終了してから，大島の田の神さまにお参りをし，オオエが宿になり，各戸持ち寄りで祝う。
(9) 6月	ノミの舟	昨日の朝，スノハ（スカンポ）の実をオカミにまき，夕方掃き集めて海に流す。
	天王さまの祭り	14日の晩。キュウリを天王さまに供えて夜籠りをする。15日は“河童”さまといって，海にキュウリを流す。この日の前にはキュウリを食べないものとされている。
(10) 7月	タナバタ	6日。男の子どもたちがそれぞれ2-3人ずつの仲間組で，小遣いを出し合って紙を買い，笹竹を伐って短冊を飾ったタナバタを作って家の庭先に立て，机の上に果物・キュウリを供える。子どもたちはオカミで，白いご飯とカライモ（馬鈴薯）汁のご馳走を食べる。タナバタは翌日海辺に立てる。
	ナノカビ	7日をナノカビという。墓払い・井戸替えをする日である。
	盆箸	7月に入ると，山から柳の枝を伐ってきて，皮をむき盆箸を1膳用意する。
	初盆の灯籠	7日に初盆のホトケのある家では，杉のボンボリを付けた柱を立て，所々にクロフジの葉を挟んだ縄を四方に張って支え，灯籠をつるす。
		浪板ではこの灯籠を“お茶柱”といい，盆の月に入ると立て，四方に張る縄には杉の葉を挟む。
		この柱を立てるとその家に“お茶立て”があることがわかる。お茶立てとは，初盆に近所の人々がホトケを拝みに行くことである。
	盆マチ	13日。気仙沼へ盆の用意をしに行き，盆船・ラッツォク・線香・供物などを買って来る。
	盆棚	13日に木枠を組んだ盆棚をオカミの南隅に飾る。棚の上段には先祖からの位牌を並べ，ホトケの小型の膳にヤマブドウ・アケビ・アワゴメなどを供え，下段にはアオリンゴ・トウキビなどを供える。

	盆の墓参り	15 日と 16 日の夜。アカシタテといって，家の前から寺までの道の所々に篠竹に小ロウソクを挿して火をともしたものを立てる。
		浪板では 15 日の晩，ロウソクタテといって，家の前から寺までの道の所々に篠竹に小ロウソクを挿して火をともしたものを立てる。
	盆船流し	16 日。アサナガシ（朝食前の食事）に小麦粉で作ったセナカデバット（すいとん）に砂糖水を付けて食べる。その後盆棚の供物を盆船に載せ「秋の彼岸に大漁もって出はれ，そしたらヤゴメもつくし，餅ついてご馳走するから」と唱えて海に流す。
⑾ 8 月	十五夜	栗・ヤゴメ・ナス・果物などを供える。
⑿ 9 月	オオエのオシラサマ拝み 3 月のその項参照。	
	お刈り上げ	30 日を“お刈り上げ”といい，“お刈り上げの餅”をつく。
⒀ 10 月	オオエのニワバライ	10 日前ごろ，ニワバライといって，オオエの稲こきが終わると，それに手伝いをした 20 戸ぐらいが，オオエでボタ餅のご馳走を受ける。
	お恵須（ママ）さま	20 日。漁の道具を集めて神棚の前に並べ，フナダマナマ・神棚・道具の分にと 3 膳の供物を整え，生きたままのドンコを供える。
⒁ 11 月	油締め	15 日を“油締め”といい，気仙沼古町の油屋にツバキの実を締めに行く。またこの日をオセヂといって，ダンゴを作って神棚に供える。
	お大師さま	24 日。お大師さまにダンゴをつぶした形の“アズキガユオダンス”を作り，1 尺 5 寸ぐらいのハギの箸 1 膳と杖を 1 本添えて供える。
⒂ 12 月	カッパレの朔日	朔日を“カッパレの朔日”という。
	権現さまの年取り	8 日は“権現さまの年取り”で，“ケンチンダンス”を作って神棚に供える。
	大黒さまの晩餉（バンゲ）	10 日の晩を“大黒さまの晩餉（晩）”といい，5 升マスに炒った豆と股大根とふつうの大根を入れて神棚に供え，「大黒さん，大黒さん，よく耳あいて聴きなはれ，この豆の数俵取らせてくだはれせ」と 3 度繰り返して唱える。

表３　資料③ 記載行事一覧

月	日	一覧表記載の行事	本文に記載のある行事	行事内容
12	20	煤掃き	ワラ打ち豆まき	炉辺の隅に，ワラを打っための「ワラ打ち石」があり，正月用のシメ縄はすべて，自分の家で作る。ワラ打ち槌はツバキの木を用いてはならず，それで打つとテンテンコブシと呼ばれる妖怪が訪ねてくると言う。尾形栄七翁（明治 41 年生まれ）は，1997（平成 9）年に亡くなる年のシメ縄まで自分で作っていた。同年の 2 月 12 日に他界された日に，そのシメ縄は神棚から下ろされた。
	28		豆まき	仁屋の豆まきも，オオイと同様に「煤掃き」の晩に行なわれる。オガミ（神棚のある部屋）から外へ向って「天打ち，地打ち，四方打ち，鬼は外，福は内，鬼の目玉ぶっつぶせ」と 3 回唱えながら，豆をまく。終了した後の升に入れた豆を，各自が手づかみで握って食べるが，そのときに，年の数より 1 つ多い数に当たると，縁起が良いとされた。
	31	お年越し	船の正月お門松迎え	正月の門松はどの山から迎えても非難されることはなかった。松ボンコ（松ぼっくり）の付いた松は，孫が生まれるといって好まれた。
			オシノグイ	正月の門松に当たるものにオシノグイがある。松の木を 2 本，神棚の正面に当たる庭に立てる。この木に松や栗の若木などを飾り，2 本の松のあいだにナラの木を添え，さらにシメ縄を松の間に張る。オシノグイの材は，年の瀬が迫ったころに山から他の松などと共に切り出してくる。このオシノグイは，正月が済むとイナグイ（稲杭）として，毎年 2 本ずつ補給される仕組みになっている。 正月の飾りは，このオシノグイから始まるが，「祝い込む」といい，外から家の中へ向かって飾り付けをしていき，はずすときは，逆に中から外へと作業をしていく。 オシノグイは 2 月 9 日の，「ダンナのダラ引き」（製作業の始まり）まで立っているが，正月の松飾りは 15 日には笹とコブの木（「さーさ，喜ぶ」の意味）に代え，2 月 1 日の「蔦（ツタ）コの正月」には，杉の葉と蔦の葉（「過ぎて伝わる」の意味）に代える。
			お年神様	オガミに飾る松の木。箒のような形をして，先端にお幣束を 5 本，挿している。本家のオオイも同様のお年神さまを飾る。
			カケノヨ	玄関の戸を開けて，すぐ右のところに横木をかけ，カギ型の小枝をひもで吊して，魚などを 5 品か 7 品をかける。それにシメ縄を張って年越しの準備をする。魚はサケ・カツオなどの塩引きや，ネウ（アイナメ）・タラなどを吊す。ほかには凍み豆腐や凍み大根，昆布，カツオ節なども吊したりする。これらは正月の食べ物として用いられる。
			トロロを塗る	元日の夜にはトロロ飯を食べる。用いたそのトロロ芋を雨戸などに塗ってあるくと，家に対して魔よけになる。そのトロロを食べると風邪をひかないといわれる。
			船の正月	大晦日の午後，漁船（漁栄丸）の一番高い場所に松飾りをつける。船の紬先にある小柱であるタツは，陸とつなぐオモテ綱を結びつけるところ，この下にオフナダマ（船霊）が祀られており，このタツにもお神酒を上げた。陸でロープを結びつけるゾウガエデにも松飾りを付ける。

1	1	三ヶ日	乗り初めと海の餅	正月2日には，船を気仙沼湾の沖まで乗り出し，神様を遥拝する。まず初めに，船のミヨシ（船首）を南に向け，トリカジ（左舷）から3回，オモカジ（右舷）から2回，バケッに汲んだアラシオ（潮水）を，船首のタツに船頭がかける。次にこのタツにお神酒を上げてから，トリカジへ回り，海の底にいるとされる水天宮様へ向かって海上安全と大漁を願う。その後は，操舵室にもあるオフナダマ様を拝んでから，オモカジへ回り，サイノカミ様へ向かって，「山のハカリ見えますように」とか「早く山を見せて下されせ」と念じて拝む。サイノカミ様とは，「山の神様」のことだという。三陸沿岸の場合，船のミヨシを南へ向けると，オモカジ側は，ちょうど北上山地を望む位置になる。そして最後に唐桑の御崎神社を拝む。 　また，この日，「海の餅」といって，オゾウ煮の餅を沖で3回けずって，海へ上げてくる。これを保存しておいて，山で具合が悪くなったときに食べれば治るという。
	2		正月の新年会　初売り	正月のオガミには，15日まで神様を描いた掛け軸がかけられる。以前は，シンルイやシンセキは正月の挨拶をそれぞれがお互いに出かけたり来たりしていたが，次第に正月2日に仁屋で合同に行なわれることになり，往来する挨拶を取りやめた。この日には，仁屋の別家など，この家から出た家の者が一同に会す。 新年会の終盤には「大漁唄い込み」が歌われる。栄七翁の弟の貞行さんは，座布団に手ぬぐいを結びつけて，歌に合わせて，船を漕ぐ仕草をした。
	3		オテガケ	オテガケとは，三宝や膳に，米・昆布・ダイダイ・炭斗などを供えて飾ったもので，これは御年始客の前に出し，礼を受けるものだという。
			門松のお膳	以前は南の方角へ向けて，家の者が食べる同じ御膳を手に持って，門松の前に立って上げたが，次第に門松の背後の位置であるオガミの部屋の，南の方角に近い障子戸を少し開けて，そこからお膳を上げるようになった。門松に上げた後，そのお膳も含め，はじめて家の者が皆，膳に箸をつけることができるものとされている。
			オミダマさま拝み	オミダマさまとは，オホトケ（御先祖様）を正月3ヶ日だけは神様として祀るもので，箕の上にご飯，アズキ餅と白い餅を1重ねずつと，串柿などをのせて飾った。年越しの日から4日までのあいだ，仏壇の前に祀られる。オミダマさまは，ローソクを上げるだけで，線香はたかない。 ミダマとは亡くなった先祖の霊のことであり，3ヶ日のあいだに，シンルイやシンセキが拝みにくる。オミダマさまに上げたご飯は，3日間そのままにしておくが，そのほかの供えた物は後でお婆さんがいただく。 箕は12月28日の「年越しマチ」へ行ったときに買ってくる。また，正月2日の初売りにマチ（気仙沼）に行ってきて，白い飴を買ってきて，これをオミダマ様へ上げた。
			ミズの餅	オソナエの残りの餅を箕の上でのした後，フロシキをを掛けて，デイ（仁屋の場合，「出居」はオカミの隣の部屋。床の間があり，日常は当主夫婦の寝室として使用されていた）の見えないところに隠しておく餅もあった。これを「ミズ（見ず）の餅」という。この餅は，元日か2日に，包丁を立てないで，餅箱の縁などで欠いて四角にして，11日の農ハダテのときに，オゾウ煮に入れる。また，オオバヤシ餅（タテ8寸×ヨコ5寸～6寸）にして，14日の御崎神社の参詣に持っていく。
			若水迎え	家の当主のことを正月中は「年男」と呼ぶが，色々な役目があった。まず，若水を迎える。早朝に井戸から水を汲み上げる仕事であるが，そのときに唱え言を3回語る。唱え言は「アキの方からお年男が若水迎えに参りました。何を釣る釣る，福の水を釣り上げる」と語る。若水を汲むバケツにはシメ縄，ヒシャクには水引きが付けられており，臼の上に置かれる。 年男はそのほかに元朝参りや，「アサヒ焚き」といって毎朝に豆殻を燃やす役，あるいは馬にシロミズ（米をといだ水）を与える役がある。正月3日の「洗濯のし始め」には，年男の手ぬぐいを先に洗い，それが済めば，あとはいつでも洗濯ができた。洗濯は12月28日から正月2日まで休んでいる。
			臼の餅	臼を逆さにして，その中に，皿を置くが，皿には生米を少し入れてから，その上に小豆餅と白餅を重ねておく。これを「臼の餅」という。臼の回りにもシメ縄をかけ，臼の上には，若水を汲むバケツとヒシャクが，これもシメ縄を付けられて置かれる。 1月4日には年男が臼を起こし，杵で臼の餅を三カエリ（3度）押し付けてみる。臼の餅に付いた生米の量によって，その年の豊作と不作を占う。鍋にもオソナエを上げるが，この「鍋の餅」は年男が食べる。
	4		「山入り」と「山の餅」	1月4日は「山入り」の日。年男がウルシとマンサクと栗の木を伐ってくる。「午」の方角（南）がよいとされる。ウルシとマンサクと栗は，「嬉し万作来る（まいこんだ）」に掛けている。山に行くときは，餅とお幣束を持つが，木を伐る前に，お幣束を土に挿し，餅を上げて拝む。その餅は，削らずに持ってきて，家に戻ってから「山」という文字を餅に書き，「山の餅」と呼んで船に置いておく。もし海で具合が悪くなったときに，この餅を少し食べさせると元気になるという。
	5	五かん日		ウルシとマンサクと栗の木は，2把を用意しておき，1把は七草粥を炊くときに用い，もう1把は15日の松納め粥を炊くときに用いる。
	6		若木迎え	1月6日は，「若木迎え」の日。小正月に門松に松の代わりに飾る，笹とコブの木を伐ってくる。

	7	七草	七草	7日の午前5時ころに年男が若水を迎えて，それで手足を洗い，口をすすいでから，クサ（七草）をサイバン（まな板）に置いて，3回，唱え言を語りながらたたく。クサは6日の午後に採りに行き，竹にはさんでおいた。七草とは，仁屋では「麦・小麦・ヨモギ・大根・菜ッ葉・セリ・ホウレンソウ」のことである。七草をたたくときの唱え言は「ドウドの鳥は田舎の土地に渡らぬうちに七草はだぐ，七草はだく，七草はだく」である。その後，天王さまと金比羅さまへ参詣に行った。前日の晩は，ヤクジ（厄神）の神様がアシゲ馬ッコ（白馬）に乗って通ると言われ，外出は禁止され，外に下駄を置くことも許されなかった。
	11	農ハダデ	農ハダテ	本家のオオイに仁屋を初め別家4軒が行き，モトヅ（元綱）を絢い，叶結びにしてから，オクラダイの上の壁に飾った。オオイではこの日，オシラサマに供えた餅を下ろしてからアサバミ（朝食）として食べた。仁屋でも，臼の餅・鍋の餅・ミズの餅などは，この日に下ろし，包丁を立てずに，餅箱の縁で欠いてから，お雑煮に入れた。このときの餅のことを「コバヤシ餅」と呼んだ。 農ハタデが済んだ午後には，メェーダマの木を伐りにいく。
	14	女の年越し		
	15	小正月	御崎神社参り	気仙沼地方で，「小正月」に参拝に行く神社としては，唐桑町の御崎神社が名高い。14日の夜から参詣客でにぎわうが，参道には露店が出て，はじきザルやサッパ船の玩具を縁起物として買い求める。仁屋では船で御崎浜港に着け，そこから歩いて参詣をした。
			小正月	この日は「メェーダマ生（な）らし」といって，紅色のミズキに餅などを生らせて，オガミに飾る。以前は，「アワボ（粟穂）ヒエボ（稗穂）」といって，カツノキ（ヌルデ）と呼ばれる木を30センチずつに切り，皮を削らないものをアワ，削ったものをヒエと称して6本ずつ12本を，新たに伐って立てた栗の木に，竹を通して吊り下げておくことも庭で行なわれた。ただし，家でメェーダマを生らす年は，外ではアワボヒエボを行なわず，外でアワボヒエボを吊した年は，家の中でメェーダマは生らさない。また，正月15日，昨年に結婚した夫婦は，初めて嫁ゴの実家やそのシンルイ・シンセキに挨拶に行く。旦那にとっては，どこに連れられて行くのか分からないので，この習慣のことを「座頭の坊」と呼んだ。
			ナマコドーリ	15日の昼間に，子どもたちが，縄で結わえたナマコを引きながら，家の回りを，唱えごとを語りながら一度めぐる。1人の子どもがナマコを引き，もう1人はそのナマコを栗の木で打ちながらあるく。栗の木は門松に飾られた木を用いる。唱え言は「ナマコドーリのお通りだ。モンモラモジ，除けさいだ。こちらの旦那様，金持ちだ。銭と金，舞い込んだ」と大きな声で語る。
			ナルカナンネカ	この行事も，本来は子ども2人で行なわれる。1人が鉈を持って，柿の木を伐るしぐさをしながら「生るか生んねか，生らざら伐るぞ」と語ると，もう一方の子が「生ります。生ります。馬ッコの千駄も生ります」と語る。
			松納め粥	15日の朝，門松からはずした松を縁側に置き，この松にお粥を上げる。この粥を松葉とともに少し残しておき，18日の朝に，松葉にお粥をつけたものを手にもって，耳に当て「（今年は）いいこと聞くように」と唱える。また，目に当て「（今年は）いいこと見るように」と唱える。家族全員が終わったら，それをカラスに与えた。
	20	ヤイドの正月	ヤイドの正月	正月20日，シメ縄のカキダレ（白い紙）を下ろしてきて，それを紙縄に絢ったものを2本作る。1本はタクバにあるお薬師さん（天王さま）に上げてくるが，もう1本は火を付け，「ヤイド，ヤイド」と語りながら，頭を3回撫でてから，目や手を払う。ヤイドとは「お灸」のことである。この日が過ぎれば，「初灸」をしてもよいし，炉で紙を燃やしてもよいことになっている。 また，この日に小正月に飾ったメェーダマを下ろし（「メェーダマをかく」という），庭先にアワボヒエボを立てたときには，これを下ろした（「アワヒエを刈る」という）。アズキ粥も食べ，これを「ヤイド粥」と呼んだ。この日は「初エビス」の日でもあるので，「エビスコ振る舞い」もした。
2	1	ツタコ正月 旦那のダラヒキ	春祈祷	2月1日，鹿折八幡神社の宮司を小々汐の会館に呼び，厄払いをしてもらう。厄年は男性の場合は年齢の下一桁に「2」と「5」が付く年，女性の場合」，「7」，「9」の数が付くときが厄年である。この日は「蔦（ツタ）コの正月」と呼んで，オシノグイの松飾りを杉の葉とツタの葉に代える日でもあるが，厄年の者がいる家では，もう一度，松飾りを行なう。
3	3	ご節句	染餅	3月3日の節句に，ヨモギを入れた菱餅に梅の花を添えて，神様へ上げる。
	16	農ヅラ様	農ヅラサマ	3月16日は「農ヅラサマ」という田畑の神様へ，マンジュウを16個作って祀った。この日は，できるだけ早く起きて田畑へ行くものとされ，逆に9月16日の農ヅラさまの日は，できるだけ遅く田畑に出るものとされた。いくらかでも長く，田畑にいてもらうためだという。
		彼岸の入り 彼岸の中日	金毘羅様	小々汐の集落の神様である金比羅様は旧暦10月10日がご縁日であるが，そのほかに「金比羅講」として，小々汐のオオイを含んだ7軒が順番にヤドを提供して，旧暦3月と10月の10日に集まって，飲食を共にしている。
4	8	お薬師様 田打ち		

5	5	ご節句	五月のセック	旧暦の4月28日から5月5日までは，鯉のぼりを上げる。ヨモギとショウブを門口，裏口，イノヒ（戌亥の方角）の門口などに挿す。この3カ所に3つずつ，あるいはこの3カ所も含めた5カ所に5つずつ挿す。4日の晩はショウブ湯に入り，布団の下にもショウブを敷いて寝て，翌日に納める。ショウブで頭を巻き，ショウブ酒を呑む。
		シラス網結い お田植え		
	18	お十八夜		
6	1	六月ヒトエ	ノミの舟	旧の6月1日は「ムケの朔日」あるいは「六月ヒトエ」と呼んで，ささやかな行事を行った。一つは「歯固め餅」と言って，正月からとっておいた餅を食べる習わしである。もう一つは「ノミの舟」と言って，スノハの実を前の晩に座敷にまきちらして，朔日の朝に掃き集めて川へ流す行事である。
	14	お天王様	お天王さま	旧暦の6月15日は，お天王さまの縁日。タクバにあるお天王さまへ参詣に行くとき，キュウリを持っていき，途中で海に向かって「これは河童さまに上げす」と言って，海に納めた。そのキュウリは拾って食べるものではないといわれた。前日の14日の晩には，「春コウセン」と呼んで，コウセン（はったい粉）を食べた。
		麦打ち		
7	7	七夕	ナノカビ	8月7日（以前は旧暦の7月7日）はナノカビ。この日，井戸替え（井戸掃除）をすると，井戸に良い水が湧くといわれた。「七夕様に貸す」と言い，この日，家の衣装を干すと「衣装持ち」になるといわれた。 七夕は天幕を張って，子どもたちに神様へ供えさせた。七夕の竹には，習字をした紙や裁縫をしたものを吊すと，習字や裁縫の技能が上がるともいわれた。 七夕の竹は，ウラ（先端）の方を残しておき，枝を3本か5本つけたものを海に立てたりする。モト（根元）は，大根畑に挿して虫除けの呪いとした。これらのことを「七夕様を送る」と言う。
	13	盆迎え	初盆	身内が亡くなってから始めて盆を迎える「初盆」の家では，8月7日から31日まで高灯籠を立てた。高灯籠は先端に杉の葉を用い，柱を支える3本の綱には葛藤の葉を4枚ずつ付けた。初盆の家では，「明かし立て」と呼んで，14日から16日までは，毎晩，灯籠を上げ，アサリケェッコ（アサリ）やトリガエッコ（トリガイ）のような貝殻にローソクを燈した。
			盆棚	8月13日に盆棚を作ることを「盆棚をかく」と言う。棚の上から先祖の位牌・団子・アワ米・果物・花の順番で上げる。「アワ米」とは，米・玄米・オダナマンジュウ・アケビ・ハッカケハシバミなどを総称して言う。盆棚の後ろ側には，「無縁様」も祀る。盆棚を作ったら魚を食べる。
	15	お盆	盆棚を祀ったオガミでの食事	8月15日は，お赤飯を食べ，16日には「セナカデバットウ」を食べる。この日，盆に帰ってきたオホトケが荷物を背負って戻っていくといわれ，セナカデ（背中あて）という運搬具に似た帯状のハットウ（はったい粉を練ったものを汁に入れた食べ物，スイトンのこと）を作って食べる。 盆中に魚を食べる日は，13日の盆棚をかいたとき，14日の昼，15日の墓参りから帰ってきたときだけである。17日からは，魚を通常どおりに食べた。
			盆舟	舟はカヤで作る。柳の枝で作る盆箸は，盆舟の帆柱に用いた。盆舟には盆棚に上げたものを乗せて，流した。
			墓参り	墓地のあるタクバに墓参りに行くのは8月15日で，お墓に上げた物にカラスが付かないと秋ジケ（時化）になるといわれるので，「カラスさ食（か）せす」と語ったり，「カラス！カラス！」と呼んだりする。このことを「オサキを付ける」と言った。
	16	送り盆	盆火とラッツォク	盆火は8月13～16日まで毎晩燃やした。オガミの盆棚の前では，下に灰皿を置いて線香花火をした。 ラッツォクは，8月15日，20日の廿日盆，30日の晦日盆に燃やす。ラッツォクを燃やしたら，家の周りを祓い，その後，戸の口（玄関）に持ってきて，足を火に近づけながら「ヘービ，ムカデに喰われぬように」と唱える。
	17		放生会（初期は16日）	仁屋が毎年お世話をしている特異な行事に「放生会」がある。1960（昭和35）年のチリ地震津波の後，仁屋の漁船の機械が故障を起こし，小々汐と同じ旧鹿折村にあった「解脱会」という宗教組織のカミサマ（晴眼の巫女）の判断によって，機械に甘茶をそそぎ，船の故障が直ったことがあった。 それ以来，毎年8月16日の送り盆のときに「放生会」を行なってきたが，中途から8月17日に行なわれるようになり，1990年代まで続いていた。以前には村社である鹿折八幡神社の宮司が関わっていたこともあった。 先にカッカ（ギスカジカ）やタナゴなどの小魚やウナギを1匹，バケツか水槽の中に生かしておく。次に小々汐の河岸前に出て，盆棚と同様の棚をかく。3段の棚の一番上には，棚に向かって中央に「天神地祇大神」，右側に「解脱金剛」，左側に「五智如来」と書かれた紙が位牌のようなものに貼られて飾られる。2段目にローソク台と最中などの菓子，お神酒が上げられる。3段目にはスイカなどの果物とお神酒が上げられ，棚の下の地面には左右に花瓶に入れた花と魚が入ったバケツか水槽が置かれる。紙が貼られるご神体は2段目にもあり，枚は「天八大竜王」，もう1枚は「為気仙沼海岸水死者・魚介類無縁一切之菩提也」と書く。つまり，気仙沼湾内の水死者と魚介

				類とを同時に祀っているのである。この棚の前に集まってきた人々は，火打石で切り火を受けてから，棚を囲んでお経を上げた。その後，1人ずつバケッを持って交代で少しずつバケツの水を河岸から海へ流していき，最後の者が魚と一緒に残りの水をまけてしまう。以前は千体地蔵のお札も流したものだと言う。
8	1	八朔の一日	八月の朔日	旧暦8月1日にカヤの箸を1膳添えて上げ，家族もそれぞれカヤの箸で食べてから納めた。
	15	お名月様	お名月さま	旧の8月15日は「お名月さま」である。臼を起こして箕を載せ，その上にサツマイモ，ゆで豆，栗やナシなどの果物を盛り，ススキやロウソクを供える行事である。この日に欠かせない重要な供物がもう1つ，昔はあった。水口などの青田から刈って作ったヤゴメ（焼米）である。この供物を頂く者を「別当様」と呼び，必ずその家の当主がその役を務め，女の人は食べるものではないといわれている。
9	16	農ヅラ様		
	18	お十八夜		
	29	お刈り上げ		
		庭払い		
		彼岸の入り		
		彼岸の中日		
10	20	エビス講	えびす講	旧暦10月10日はエビス講。俗に「財布ざかな」と呼ばれるドンコ（エゾイソアイナメ）を上げる。ドンコは根魚の類で，食べたものを口から出すので，「財布ざかな」と呼ばれる。ドンコは2匹，腹と腹とを合わせて上げる。お膳は，オエビス様とお大黒様への2膳。オハギ，刺身，オスイを上げる。
11	11	厄神除け	ヒトハダケ餅	この日は「やく神除け」の日として，オオイのシンルイのみで行なっていた。アズキ餅を鍋ごと供える。餅を食べたあとは外出することはできなかった。
	15	油しめ		
	24	オダイシ様	オダイシさま（旧暦）	新暦の11月24日にハギの箸を2本と，ほかに1本の長いハギの箸をお膳に付けて，神様に上げる。長い箸はオダイシさま（弘法大師）の杖ともいわれ，これを用いて字をなぞると，縁起が良いとされた。この日はアズキ粥を食べる。 11月から翌年の2月までは，年中行事は新暦を用いる。
12	1	カッパライの朔日		
	8	権現様の年越		
	10	お大黒様	お大黒さん	12月10日は「お大黒さん」の日。二股大根と普通の大根を並べて上げる。升の中にも大根と豆，火ばさみを入れ，神様の前でほろぐ（揺り動かす）。このときの唱え言は「お大黒さん，お大黒さん，いいこと聞きますように」と語る。また，オエビスさんとお大黒さんはオガタ（妻）のもらえなかった神様なので，それらの神様に上げたお膳は，子どもや未婚者には食べさせなかった。
		冬至	カボチャ粥	冬至には明るい色の「カボチャ粥」を食べる。

に赴いて行事を手伝ったり，指導したりしている。それらの事例は，この時期のオオイの行事を知る貴重な資料にもなっている（表3）。

この報告でも，これまでと共通する行事が示される一方で，この報告だけに見られる行事も確認することができる。後者のうち，まず，1月4日が「山入り」の日とされる。

> 一月四日は「山入り」の日。年男がウルシとマンサクと栗の木を伐ってくる。「午」の方角（南）がよいとされる。ウルシとマンサクと栗は，「嬉し万作来る（まいこんだ）」に掛けている。山に行くときは，餅とお幣束を持つが，木を伐る前に，お幣束を土に挿し，餅を上げて拝む。その餅は，削らずに持ってきて，家に戻ってから「山」という文字を餅に書き，「山の餅」と呼んで船に置いておく。もし海で具合が悪くなったときに，この餅を少し食べさせると元気になるという。ウルシとマンサクと栗の木は，二把を用意しておき，一把は七草粥を炊くときに用い，もう一把は一五日の松納め粥を炊くときに用いる［川島 2014:20-21］。

ここではウルシとマンサクと栗の木が，「嬉し万作来る（まいこんだ）」という言葉にかけている

点が興味深い。同様の語呂合わせは，小正月のコブとササ，ツタコ正月（2月朔日）のツタとスギでも行われていた。もう一つ，興味深いのは，「山の餅」の存在である。山にお供えした餅を削らずに持って帰り，「山」という字を書きこみ船におく。「海で具合が悪くなったときに，この餅を少し食べさせると元気になる」とされる。すなわち山に供えた餅が，海での身体の異変に際して，呪薬の役割を果たす。実は川島は，「海の餅」についても報告している。彼によると正月の二日の日に，乗り初めが行われた。その際には海での方位がわかるための祈願として「「山のハカリ見えますように」とか「早く山を見せて下されせ」」と「サイノカミ」に祈る。この「サイノカミ」は「山の神」であるという。さらに一連の行事の中で，「「海の餅」といって，オゾウ煮の餅を沖で三回けずって，海へ上げてくる」という。残りの餅を保存しておき，今度は，「山で具合が悪くなったとき」に少し食べれば治るとされている［川島 2014:13］。

この一連の行事とその背景にある民俗信仰には，「山」と「海」との幾重もの対称的な構造が見て取れる（表4）。山の餅は，1年で初めての山入りの日であるが，その日には，家のために数種類の木を刈り込んでくる。カミサマに供えた餅は，削らずに持ち帰り，海での異変のために保存しておく。対しては海の餅は，海に初めて船を出す日に行われるが，この日は神々に通拝することが目的で海から何も取ることはしない。また，雑煮に用いて人が食べるのと同じ餅を「沖で三回けずって」から持ち帰り，山での変事のために取っておくのである。このような対称的な儀礼実践が行われていたことは，他の報告に見ることができず，民俗信仰の構造論的な位置付けを考えるうえでも貴重な事例である。

表4　モチの構造論

	他の収穫物	食の可否	餅の加工	効　用
ヤマのモチ	＋	－	＋	海での異変に効く
ウミのモチ	－	＋	－	山での異変に効く

また，「春祈祷」と「金毘羅講」についての記載もこの報告で登場する。2月1日には鹿折八幡神社の宮司を小々汐の会館に呼び，厄払いをしてもらう。厄年は男性の場合は年齢の下1桁に「2」と「5」が付く年，女性の場合，「3」，「7」，「9」の数がつく年とされる［川島 2014:32］。

また，この日は，「蔦（ツタ）コの正月」と呼び，オシノグイの松飾りを杉の葉と蔦の葉に代える日でもあるが，厄年の者がいる家では，もう1度松飾りを行なう。小々汐の松鼻の「金比羅講」は，3月10日と10月10日に行われていた。村の多くが参加する祭日は，旧暦10月10日であったが，そのほかにオオイを含んだ7軒が順番にヤドを提供して，飲食を共にしていた。実は，これらの行事については，資料②にも記載されていた。ただし年中行事の項目としてではなく，「春祈祷」は「人の一生」の「年祝い」として［東北歴史資料館編 1984：108］，「金毘羅講」は「漁浦の協同生活」の「(2) 集落の年序階梯組織及び講集団」に記されていた［東北歴史資料館編 1984:103］。この問題については❸で確認することにする。

この他に，仁屋が世話をしていた行事に「放生会」がある。1960（昭和35）年のチリ地震津波の後，仁屋の漁船の機械が故障を起こした。小々汐と同じ旧鹿折村にあった「解脱会」という宗教組織のカミサマ（晴眼の巫女）の判断で，機械に甘茶をそそぐと，船の故障が直ったことがあった。それ以来，毎年8月16日の送り盆のときに「放生会」を行なってきたが，中途から8月17日に行

なわれるようになった。行事は1990年代まで続けられ，村社である鹿折八幡神社の宮司が関わっていたこともあった。行事の概要は以下のように記されている。

> 先にカッカ（ギスカジカ）やタナゴなどの小魚やウナギを一匹，バケツか水槽の中に生かしておく。次に小々汐の河岸前に出て，盆棚と同様の棚をかく。三段の棚の一番上には，棚に向かって中央に「天神地祇大神」，右側に「解脱金剛」，左側に「五智如来」と書かれた紙が位牌のようなものに貼られて飾られる。二段目にローソク台と最中などの菓子，お神酒が上げられる。三段目にはスイカなどの果物とお神酒が上げられ，棚の下の地面には左右に花瓶に入れた花と魚が入ったバケツか水槽が置かれる。紙が貼られるご神体は二段目にもあり，一枚は「天八大竜王」，もう一枚は「為気仙沼海岸水死者・魚介類無縁一切之菩提也」と書く。つまり，気仙沼湾内の水死者と魚介類とを同時に祀っているのである。この棚の前に集まってきた人々は，火打石で切り火を受けてから，棚を囲んでお経を上げた。その後，一人ずつバケツを持って交代で少しずつバケツの水を河岸から海へ流していき，最後の者が魚と一緒に残りの水をまけてしまう。以前は千体地蔵のお札も流したものだと言う［川島 2014:46］。

ここで示した事例の多くは，仁屋が中心となる行事と位置づけることができる。新年会や放生会は，仁屋が主体となって執り行なってきた。また，その他の行事についても，次節で紹介するオオイからの聞き取りからは確認できなかったり，行事の細部で異なったりする部分も見られる。実際，そこでは食べ物や準備する植物，あるいは唱え言などにも微細な違いがあった。これらは家単位で行われる行事が，同じ集落内で微妙な差異を孕んでいることを示している[(2)]。ただ，第一別家である仁屋は，他の別家とともにオオイの家で共同作業に従事する行事も多い。それらの行事と比較するうえでも，任屋の行事の詳細が記されたこの報告は貴重である。

最後に小池淳一による「東日本大震災と文化資源―気仙沼市小々汐地区から―」について紹介しておく（以下資料④）。この論考の主な目的は，宮城県気仙沼市小々汐地区での文化財レスキューの経過報告とその意義を整理することにある。同時に，震災以前から継続してきた民俗調査のデータ提示と国立歴史民俗博物館の常設展示への適用事例を示している。

この議論で小池は，国や自治体から「文化財」の指定も登録も受けていない生活資料や民具をレスキューするための方途として，「文化資源」という概念を提示する。文化を「財」に還元するのではなく，「資源」と捉える視点は，それらを位置づける「主体」や「目的」の相対性を担保できると小池は論じる。ここでの文化資源は，先験的に価値のあるもの，普遍的に保護の対象となる「文化財」とはみなされない。むしろ「特定の条件や環境のなかで，価値を見出す主体によって初めて文化は資源として扱うことができる」［小池 2014:172］と捉えられる。逆に言えば，そのような価値観を引き受けるものが，特定の対象を「文化資源」と位置づければ，それらをレスキューしたり，保全したりすることも可能になる。震災によって倒壊した家屋や散乱する生活用具を，瓦礫やゴミとして廃棄するか，文化資源として保全するかの判断が，ここで作動する。「ゴミと判断された先には活用や意味づけは想定されていないが，ゴミではなく民俗文化資源であるととらえた場合には新しい意味や活用の可能性が生じてくる」［小池 2014:172-173］と小池は論じている。

もちろん，それらの「価値」を独善的なものとしないためには，研究者や地域住民，あるいは別の第三者などによってそれらを承認し，共有するプロセスが必要になるだろう。この問題については稿を改めて考えることにしたい。いずれにせよここで小池は，文化をフィールドワークの広い文脈の中で捉え直し，モノのレスキューだけではなく，その背後で育まれてきた生活文化の継起的なありように目を向けている。震災によって寸断されたかに見える調査研究を重ね合わせ，連接させようとする強い意志を見て取ることができる。(3)

具体的な生活文化の有り様として小池が提示するのが，震災以前の2009年度から10年度にかけて聞き取ったオオイの年中行事の様子である。

彼はそこで自分たちが調査に赴いた盆行事と正月行事の報告を行なっている。まず，盆の行事については，1）盆の支度，2）盆棚作り，3）迎え火，4）盆礼について紹介している。正月行事は，1）エビス講，2）年越しの支度，3）新年の儀礼が報告されている。盆の支度では，気仙沼市街地での盆マチの様子が報告される。あるいは,「セナカデハット」とともに食される「のっぺい汁」や盆舟を墓地で焼く現代における儀礼的実践も紹介されている。正月の行事でも，「マチの日」の様子が記され，松飾り，臼ふせ，お年神，オミダマ，オシラ様などについての詳細な報告が行われている。また，7日の七草，小正月までの一連の行事が紹介されているが，これらの行事は，かなり簡素化されているか，行事の内容も簡潔に記されているにすぎない（表5参照）。

行事の概要については，すでにこれまで見てきた報告でも紹介されていた。しかし，いくつかの記述では，これまでの報告にはないレベルの詳細な記録化が行われてもいた。その具体的な事例として，「盆の支度」と「盆棚作り」についての記述を抜粋してみたい。

> 1）盆の支度　盆の買い物は12, 13日に行う。この両日, 港近くの交差点に盆マチが出る。これは近隣の農家の主婦たちが，盆に用いるさまざまな道具や供物を売るもので，今ではスーパーなどでも購入できるが，根強い人気がある。
>
> 売られる品は，盆舟（真菰，500円），帆柱（柳，100円），お棚もの（「山のもの」ともいう。アケビ，栗，山ナシ，ハシバミなど。200円），お棚饅頭（小麦を原料とし，食紅などで五色に色をつけたもの。200円），カキダレ（盆棚の柱に飾りつける色紙。200円），コンブ（同前。200円），ラッツオク（13，16，30日の晩に燃やす。麻殻の端に硫黄を塗ったもの。3把で200円），竹筒（墓での花立て。500円），花（300円）などである。全て，山間の農家が畠や家の周りで調達して作ったものである。
>
> 盆マチに店を出す人は年々少なくなってきており, 今年は3人だけであった。12日は9時から7時頃まで，13日は午前中で，安くしてでも売り切り，荷物をなくして帰る［小池2014:176］。

盆の支度に登場する「盆マチ」は，小々汐の事例ではない。しかし，小々汐の多くの家でも，この日に「盆マチ」に出て様々なモノを購入していた。ここで販売されるものはオオイの盆の準備にも必須のものが多い。特に盆舟の材料がマコモやヤナギといった独特の植物であり，しかもそれらが山間部の農家から購入されていたという事実は，民俗誌的な資料として記録されるべきである。また，調査時期での具体的な金額が明示されていることも他の報告には見られないデータである。

表5　資料④ 記載行事一覧

	項目	行事内容
盆の行事	1)盆の支度	盆の買い物は 8 月 12, 13 日に行う。この両日, 港近くの交差点に盆マチが出る。近隣の農家の主婦が, 盆に用いるさまざまな道具や供物を売る。 売られる内容について盆舟お棚もの＝「山のもの」, お棚饅頭, カキダレ, ラッツオクなど。 盆マチの店舗数の減少。2010 年の時点で 3 人。
	2)盆棚作り	「盆棚をかく」：盆棚のサイズ盆棚, 供え物についての紹介。盆棚をかいた後は「お精進」といい, 魚や肉などは食べない。
	3)迎え火	3 日「迎え火」：屋敷の墓で稲の藁束を 10 束ほど燃やす, 以前は海に火をつけた藁束を流したという。かつては麦藁であった。 夜に家の庭でラッツオクを燃やす。火を点けると 1 本づつ家屋と平行に置き, さらに家から門に向けて 1 本づつ置く。
	4)盆礼ほか	墓参りは 3 ヶ所行く。まず小々汐, 大浦, 二ノ浜, 三ノ浜の 4 地区共同の墓地, 次に小々汐の沢沿いにある古い墓, 最後に屋敷地内にある古い墓の順番に回る。 親戚を訪問。午後にはガーゼタオルや風呂敷と御仏前（2000 円）とを持って, 親戚を回る。 16 日盆棚の片付けと盆舟を仕立て。供物を蓮の葉に包み, かつては海に流したが今は墓地で燃やす。夕方にラッツオクを燃やす。30 日はミソカ盆といい, 再びラッツオクを燃やす。
正月前後の行事	1)エビス講	12 月 6 日が 2010 年のエビス講であった。恵比寿大黒に魚を用いた膳を夕方に供える。恵比寿大黒の紙札が貼ってある下に膳を二つ置く。オオイではドンコの田楽を必ず作る。
	2)年越しの支度	**ススハキ**：かつては 12 月 20 日前後に分家の人々がオオイのススハキに参集し, 仕事を分担した。この時に餅つきもしたし, 松を取って来る役や豆撒きをする役などが分家ごとに決まっていた。この日に分家の長老によって尾形家や小々汐にまつわる伝説が語られることが多かった。
		餅つき：27 日の午前中に機械でついた。
		マチの日（マチ買い）：28 日午前中に, 市の中心街の呉服店へ夫婦で行き, 新年の挨拶回りに用いるおしぼりを 12 セット買う。オシラサマのオセツ（かぶせる布）もここで買う。お年神様のお膳用の茶碗, 汁用椀, 箸。かつては若水用のバケツと柄杓も買った。仏壇用の花も買う。
		ツメマチ：28 日から 30 日までの間, 盆マチと同じ場所に気仙沼の新城, 所沢といった山間部の主婦が注連縄, 松, 南天などを売る店を出す。
		松飾り：30 日は屋外の神々に松飾りをする。屋敷地内にある明神様（山の神）には, 幣束を立て 2 本の柱に注連縄を通し, 松の枝を柱に結わえる。オハネリ（生米）をまいてから, 神前に祈りを捧げる。金比羅様の石碑, オオイの家からは向かいの入山の山腹にあるイワクラ様, 元の屋敷跡と伝えられるタクバの近くの天王様でも同様の所作を行う。タクバの屋敷地にあった井戸の井戸神様（場所不分明）にも幣束をたてる。
		31 日は屋内の神々の飾りをする。縁側の柱に松と栗に昆布と水引を重ねて括りつける。この時, 枝が五段に分かれている松を選ぶ。
		屋敷地内の建物にも幣束を供える。中門, 車庫, 石倉, 木小屋, 板倉, 厩, 便所の 7 カ所である。屋内にも, 囲炉裏の上の屋根裏に 12 本（閏月は 13 本）, 座敷の屋根裏に 7 本の幣束をさす。また水神様と称して裏山から引いているの脇にも幣束を立てる。
		臼ふせ：31 日に皿に生米を敷き, その上に白餅と煮たをき込んだ小豆餅を置く。さらにその上に臼をかぶせておく。4 日の朝に起こす。同じことを小正月の 15 日の晩にも行い 31 日に起こす。
		お年神　まっすぐな松の木の皮を剥いて白い棒をつくり, 先端にその年に刈った青いを巻き付けて 3 ヶ所を縄でしばって箒状にしたものに, 五色の幣束をさす。これをお年神様といい, 座敷の隅の年神の紙札のそばにたてる。
		オミダマ：箕に餅と小豆餅を 5 つづつ串にさしたもの, 干し柿, みかん, 勝栗, 布海苔を並べ, お年神様のそばに南に向けて天井から吊す。モチを差す串は, アオキの枝を用いた。ただ, 震災前は近くにアオキがなかったため, 常緑の木の枝で代用していた。
		オシラ様：ふだんは箱に入れて神棚の向かいの屋根裏にしまっているが, 正月には降ろしてオシラ様を出し餅を供える。またロウソク, 線香立ても用意し, 左脇にオハネリという米を入れる鉢を置く。
	3)新年の儀礼	**若水**：元日に当主が朝五時に起き, 水を汲みその水でお茶を入れ, 煮炊きにもその水を用いる。
		年頭の挨拶：分家の当主たちが朝 8 時過ぎから次々に挨拶にやってくる。当主はオテカケを脇に置いて応対する。小々汐集落全体の新年会は 10 時から集会所で行われる。2 日は当主が親戚の挨拶回りに出かける。主婦は家にいて挨拶を受ける。
		七草：6 日に草を摘み, 当主が唱え言「唐土の鳥が, 日本の国へ渡らぬうちに七草たたけ」を唱えながら叩いて粥を作る。
		小正月：15 日のうちに門松に笹とコブの木とを結わえておく。「ささ（笹）, 喜（コブ）べ」という意味だという。31 日には漆と杉を結びつける。これは「うれし（漆）く過ぎ（杉）た」という意味だという。

同じく「山のもの」は，次に述べる盆棚や仏壇に飾られるものであり，その具体的なレパートリーとして，「アケビ，栗，山ナシ，ハシバミ」などが示されている。

2）盆棚作り　盆棚を作ることを「盆棚をかく」という。仏壇のあるオカミではなく，庭に面した神棚のあるナカマで庭に向けて作る。仏壇から位牌を全て移し，掛軸を下げ，飾りつける。盆棚の前に机を置き，ウチシキを敷いて，供物や線香立てやロウソク立てを置く。盆棚は高さ1880ミリ，幅1500ミリ，奥行き910ミリ程度。上段に位牌，団子，落雁，お膳などを置き，二段目には盆舟，茶碗に水を汲み，ミソハギの花の枝を添えて置く。

盆棚の奥の壁に十三仏の掛軸を下げ，前面に莫蓙を垂らして，掛軸や観音や祖師などを描いた軸を下げる。痛んで吊るせなくなったものも多くある。2010年は11本下げた。

盆のお膳は，上段と2番目，さらに空になった仏壇にも供える。盆棚をかいた後は「お精進」といい，魚や肉などは食べない［小池2014 176］。

盆棚については，設置される場所や配置，飾り付けの内容などは，仁屋との比較の際に重要な指標になるだろう。その具体的な様子については，当時，撮影された写真からも確認できる。しかし，盆棚の裏側の「盆舟，茶碗に水を汲み，ミソハギの花の枝を添えて」いる様子について記録されることはあまりなかった。盆棚の具体的な大きさとして「高さ1880ミリ，幅1500ミリ，奥行き910ミリ」と記されていることにも注意しておきたい。これは，小池らの調査が歴博での再現展示を見据えたものであったからである。実際，2013年以後の歴博の常設展示では，毎年の夏の時期には，この盆棚の再現展示が行われている【写真2】。このように具体的な展示を見据えた場合，写真記録はもちろんのこと，計測，計量を含めた生活資料についての詳細な記録化が行われて然るべきなのである。

写真２　国立歴史民俗博物館での盆棚の再現展示

もっとも，震災前の調査は途上にあり，報告自体はコンプリートなものではなかった。微細な部分での道具類や手順についての記述の誤りや勘違いも散見される。例えば正月のお年神について，「箒状にしたものに紅白の幣束をさす」と記しているが，後の調査で確認できる幣束は「五色」である。その意味でも，

小池の記述は，民俗誌記述の可能性と課題を同時に提示している。

❸……行事の変遷とその厚い記述に向けて

戦後の研究報告に記された年中行事の概略を紹介してきた。この章では，これらの資料を並列化・階層化していくうえで明らかになった問題点を整理したうえで，日記資料を読み解くうえで留意すべき点について整理しておきたい。資料から抽出したデータを重ね合わせる過程では，いくつかの注意すべき段階がある。それらを大まかには，⑴記述データの検証の段階，⑵データの背景検証とデータ間の調整の段階，⑶データの重ね合わせの段階，にわけることができる。

⑴では，最初に発話者，ないしは記述者の記憶違いや記述上の誤りがないかを検討する。単純な数値や年代，漢字表記のケアレスミスなどが検証の対象となる。明らかな誤りが認められた場合には，その部分についてはデータの重ね合わせから削除する。ただし，そのような報告があったことは，参考資料として残しておく。

誤謬ではなく，同じ対象の表記をどのように表現するのかという問題もある。複数の報告では，地域における行事や道具，地名，屋号などの表記にズレが生じている。例えば1月11日に行われるノウハタデは表記として「ノウハダテ」（①）「農ハタテ」（③）といった複数の表記があった。同じく12月20日に行われるススハキは，資料①や②では「煤払」，「ススハライ」と表記されていた。また，オオイという呼称が，①では「本家」という一般的な呼称を用い，②では「オオエ」と記されている。

表記のズレの多くは微細なものであり，現地での呼称を表記した際のズレと考えられる。しかし，これらのズレもデータベース検索に際しては，注意が必要になる。「オオイ」では検索にかかり，「オオエ」では検索から抜け落ちては，資料としての精度は低いものとなる。アーカイブを構築する際には，シソーラスの作成を念頭に入れた作業が必要になるかもしれない。「煤払」と「煤掃」のように漢字で意訳した表現になると音訳を補足する必要も出てくるだろう。これらは単純な間違いとはいえない記述，あるいはより統合的な記述を必要とする案件と言える。

また，同じく表記上の問題を含むものの，より専門的な知識と在地の文脈を理解する必要があるのが，動植物などの名称である。とりわけこの小々汐の事例では，植物の表記の仕方とその同定の問題がある。例えば，小正月に飾られるコブの木が資料②では「コンブの木」と呼ばれ，実際には「ニワトコ」であると記されている。たいして資料③では「コブの木」とだけ表記されている。同じく小正月の繭玉飾りに使う木は，資料②では「ミズヒラの木」と表記され，資料③では「ミズキ」と表記される。この場合は，標準和名がニワトコであったり，ミズキであったりすると考えられるため，現地における呼び方（方名）をどのように表記するかが問題となる。

たいして，6月1日に行われるノミの船で用いられる植物名に種レベルのズレが生じている。資料②では「スノハ（すかんぽ）」と表記され，資料③では「スノハ（大黄）」と記される。まず問題なのは，カッコ内の植物名が専門的な検証を経るまでもなく，標準和名には当たらないことがわかる点である。「すかんぽ」は，そもそも標準和名ではない。仮に小々汐で二つの方名があり，一方をカッコ内に示したとしたなら，記述としては間違いではないが，説明にはなっていない。また，

「すかんぽ」は多くの地域では，イタドリの方名であり，基本的な誤解を招く可能性もある。一方，「大黄」は，ダイオウ属（学名：*Rheum*）に属する複数の種を含み，薬用植物として栽培されるものが多い。いずれの種も冷涼な気候を好み，小々汐に自生しているとは考えられない。ここで注意されるのは，同じ資料③に掲載されたスノハの写真である。写真は，花穂と葉と茎の一部が示されているが，おそらくこの植物は，標準和名では，「スイバ（*Rumex acetosa*）」ないしは，「ギシギシ（*Rumex japonicas*）」と考えられる。この植物の実は，菱形をしており船の形に見立てられないこともない。また，実がなる時期もこの6月に符合する。

同様に誤解を招くのが，2月の朔日から飾られるツタである。これは，資料②では，「ツタウルシ」と呼ばれる。資料③では「ツタ」と表記され，1月の晦日に杉と共に飾られる。これは「ツタなくスギる」，あるいは「スギてツタわる」という語呂合わせとされる。しかし，現在のオオイからの聞き取りでは，これは「ウルシ」と表現されていた。こちらは「嬉しくすぎる」という語呂合わせに合わせたものである。ただし，実際にオオイで確認した植物は，屋敷の周囲にも生えていたキヅタ（*Hedera rhombea*）であった。しかし，その呼び方は，必ずしも単なる誤解でなかったことが，資料②の報告から確認することができる。ただしキヅタとウルシとの間に，どのような見立てが行われたのかは明らかではない。

次に記述されたデータの背景として，時間（時代）や場所，担い手の範疇を確認しておく必要がある。過去の資料や報告を並列化し，階層化するためには客体的な時空間とその認識の問題，そして担い手の意識の問題が浮上してきた。

まず時間の問題として，年中行事はそもそも，暦に沿って執行されるものであった。生活に用いられる暦は明治以後，太陰太陽暦から太陽暦に変更されるというマクロな変化が起きた。しかし，多くの年中行事は，暦にすぐさま対応することはなかった。昭和初年の段階でもほとんど全ての年中行事は旧暦に沿って行われていたことが日記資料からわかっている。

報告書のレベルでも，資料①で示された行事の多くは，旧暦に沿ったものと理解していいだろう。資料②の報告にあるものは，微妙で判別がつきにくい。しかし，資料③によると，1980年代には，11月から2月までの行事の多くが，新暦に沿って行事が行われていた。また，盆，お名月といった夏の行事については，ちょうど一月遅れで行事が行われていたことも記されている。ほぼ同じような暦の読み替えは，オオイでも行われていたことが聞き取りから確認することができる。

ということはおそらく1970年代，もしくは80年代以後の小々汐では，三つの行事歴が存在したことになる。すなわち，節句や七夕，あるいはエビス講のように旧暦の日時に沿って執行する行事がある。次に正月の準備に関わる作業や，正月，小正月，彼岸の中日など新暦に準じて行われる行事がある。最後に，両者の折衷ともいうべき新暦の一月遅れの行事として，盆やお名月の行事があったわけである。これらの差異を考慮し，各々の報告がどの暦に対応するかを再確認しながら，年中行事の営みを把握する必要がある。

次に記録された行事の地域的な広がりと偏りについて検証しなければならない。調査対象の空間的な広がりは，記述された資料を読むときや，聞き取り資料を編集する際に，研究者たちが状況に応じた視点に基づいて分節化することが多い。報告書ごとにユニークな事例が登場するケースの多くは，この空間的・社会的なカテゴリーに振幅があるからである。

本論では，行事が行われる場所が小々汐内か否かを基準として捉えていく。これまでみた資料の中には，小々汐以外で行われた可能性のある行事や，小々汐を含んだ広域で行われていた行事も紹介されていた。逆に小々汐においても特定の家で行われているに過ぎず，あまり一般的とは言えない行事も検証しなければならない。

例えば，資料②の「薬師様の祭典」の事例は，実施される場所が気仙沼大島になるため，厳密には小々汐だけでなく四ケ浜の事例とも言えない。しかし，四ケ浜から漁に向かう者も参加した事例として，ここで紹介されたものと考えられる[(4)]。同じ報告の小正月のカセドリについては，日記資料を含めて他の資料には見当たらない。聞き取りに梶ケ浦の話者が加わっていたことから類推して，小々汐以外の四ケ浜で行われていた行事かもしれない。資料②は報告書で紹介する地域が四ケ浜であるため，事例が掲載されたことについては問題がないし，小々汐に限定した他の報告に見られないことにも納得がいく。

他方の偏りには，村よりも小さな単位，特定の親族や家レベルでの行事かどうかが問われる。たとえ小々汐に住む話者であっても，当事者の家でしか行われていない行事が報告された可能性も否定できない。逆に記録された時点で行事は存在せず，行事の伝承も残されていない家でも，過去にも行われていなかったとは断言できない。一部の家に残っている行事が，かつてはより広域で行われていた可能性も捨てきれないからである。

資料③では，仁屋という家レベルに特化した行事であるため，他の報告に見られないものが見られる。例えば，仁屋における新年会は，仁屋とその別家だけで構成される年中行事である。それは特定の家に特化した行事であって，小々汐の行事として捉える必要はないかもしれない。他方で報告者の川島自身が「特異な行事」と記している放生会は，歴史的深度も浅く，こちらも家単位に特化した行事のように見える。しかし，写真などを見ると仁屋が主催していることは間違いないものの，小々汐内で漁をしていた何軒かの家は参加していたようにみえる。その意味で小々汐のある時代の盆の行事としてこれらの事例が報告されていたことは，小々汐の年中行事の推移を捉える場合に貴重な事例と言えるだろう。

また，第3の課題として行事の担い手の検証が必要になる。これは，単なる行事への参加者という意味ではない。参加者の広がりも確認が必要だが，これに加えて行事へのコミットの度合いを測る必要がある。すなわち行事の主催者なのか，それに準ずる指導的な立場なのか，あるいは，家格や年齢のために周辺的な立場なのかも確認しなければならない。この作業は行事を語ったり，記録したりする当事者の立場性を考慮することにもつながる。

以上の作業に加えてデータ間の検討が必要になる。すなわち，参照した事例間に差異やズレがあった時点で，その要因について再検証しなければならない。ここでの検証の過程は，上記の事例ごとの検討課題に加えて確認すべき資料がある。すなわち他の事例やマクロな事例を参照することで，事例ごとの関連性を洗いなおし，文脈を把握し直す必要がある。同時に一つの報告書のなかで，年中行事以外の章や項目に該当する行事や関連する記載がないかも検証しておく。これらの作業を経て，ようやく時系列的な変化と考えられる記述を確定することができる。

日記資料に記された年中行事には，祭礼・芸能や民俗信仰，あるいは衣食住といったカテゴリーと重複するものも多い。本来，民俗文化を完全に分節化することは難しく，他のカテゴリーと何ら

かの関連性をもっているものかもしれない。オシラあそばせやお寺参りは，民俗信仰と重複しているし，3，9月の16日の「ノウヅラダンゴ」は，田の神の行事ととらえるなら民俗信仰に，団子作りに重点を置くなら衣食住に関連するだろう。

逆に既存の報告の年中行事の項目には，祭りが含まれることが少なかった。しかし，例えば報告②では，別の節で祭りについての記述が見られるのである。すなわち，旧暦8月15日に行われる鹿折八幡神社の祭礼や，旧暦9月29日に行われる羽田神社の祭礼は，「魚浦の共同慣行」の「祭祀」の項で記されている［東北歴史資料館編 1984 106］。これ以外にも3月に行われる「春祈祷」は，「人の一生」の「年祝い」に紹介されている。行事の当事者が厄年の者であるため，「年中行事」より「人の一生」，すなわち「通過儀礼」としての側面が強調されている。あるいは「金毘羅講」は「漁浦の協同生活」の「(2) 集落の年序階梯組織及び講集団」に記されていた。すなわち，「社会組織」の一部として分類されているわけである。［東北歴史資料館編 1984 108］[(5)]。

❹……尾形栄一日記に見る年中行事

それでは『尾形栄一日記』には，どのような行事が記されていたのだろうか。これまで整理した資料を参照しつつ，日記から抽出した年中行事が表6になる。表では1932（昭和7）年と1933（昭和8）年の行事に分けて記した。すでに記したように日記の序盤は，両年ともに旧暦12月から始まっている。そのため年中行事では，ススハキの記事が最初に登場する。ススハキは別家の者がオオイの家に参集し，各部屋の大掃除や正月に備える作業を行う行事である。

一月二十三日土曜晴起＝七時十分前寝＝八時二十
日は家のすゝはきです。朝早くから外の家の
人が来て居ます。朝はかなり早かった。（中略）
家に来たら外の人たちはおしめ
等をこしら(ママ)へて居た。
庭をはいたりした。今夜はすゝはきもちです
たいへんにうまいのでたくさんに食べました
夕はんがすぎたら鬼うつまめをまいた。
まめをたべた。大だしに大ぜい居たのであそぶ
まめを食ってねた。

日記に記された1月23日は，旧暦の12月16日にあたる。最初に確認しておきたいのは，ここで日記の著者である栄一氏が「すゝはき」と記述している点である。前節で見たように初期の報告書には，「ススハライ」や「煤払」と記されていた。しかし，より古い時代の地元の視点から書かれた日記が「すゝはき」であるならば，近年の報告にある「ススハキ」をこの行事名にすることが妥当であると判断できる。

ちなみにこの日の前日には，「明日のすゝはきのため人をすけられるのをたのんであるいた」と記

表6　尾形栄一日記記載年中行事内容一覧

旧暦	新暦	1932 年の行事内容
12,14	1,21	お参り
12,15	1,22	１５日参り ススハキの準備
12,16	1,23	ススハキ
12,28	2,4	２８日　町の日 ＝市場が立つ
12,29	2,5	年越し
1,1	2,6	元旦
1,7	2,12	七草粥
1,11	2,16	ノウハダテ
1,15	2,20	小正月 あわぼへいぼ 明神社のお松 もちでおまいり コウシン（行進？　庚申？） 大漁歌い込み
1,16	2,21	おしら様参り
1,17	2,22	学芸会
1,20	2,25	エビス講
2,1	3,7	演芸会
2,4	3,10	陸軍記念日
3,3	4,8	旧の３月３日 大漁祭 桃の節句祝い
3,16	4,21	旧の 16 日
3,24	**4,29**	**天長節**
4,28	6,2	田の 28 日
5,3	6,6	おたのかみ（食）
5,4	6,7	端午の節句の準備
5,5	6,8	端午の節句
5,11	6,14	神様あそばせ
5,15	6,18	おさなぶり 小田の神様 八幡様
5,18	6,21	御十八夜＝モチ
6,14	7,17	御天王様
7,4	8,5	七夕
7,5	8,6	七夕　かみより
7,6	8,7	七夕ふさながし　おはつ

旧暦	新暦	1933 年の行事内容
12,11	1,6	ススハキの準備
12,12	1,7	ススハキ
1,1	1,26	元旦 うしぬぐい＝おしぬぐい おかざり 寺参り（祖父の菩提か?） 小々汐中を廻る＝年始
1,3	1,28	年始
1,4	1,29	若木むかえ
1,5	1,30	正月　年始（まわる） 踊り・芝居（坂口家）
1,7	2,1	お参り（タクバの天王様）
1,10	2,4	ノウハタデ（準備）
1,11	2,5	ノウハタデ
1,14	2,8	アワボヘイボ
1,15	2,9	学芸会（小正月） ナマコ引っ張り 歌い込み
1,16	2,10	お寺参り
1,17	**2,11**	**紀元節**
1,18	2,12	松木つみ
1,20	2,14	エビス講
2,1	2,24	年始
3,9	**4,3**	**神武天皇祭**
3,16	4,10	16 日まんじゅう
4,5	**4,29**	**天長節**
5,1	5,24	鯉のぼりをたてる
5,4	5,27	端午の節句
5,5	5,28	端午の節句
6,14	8,4	天王様におまいり こうせん
6,15	8,5	天のう様の盛り日

7,7	8,8	七夕の翌日　流し 盆の準備　墓，家の周りの清掃
7,13	8,14	旧の13日　町の日　お盆 盆棚
7,14	8,15	せなかでばっとう
7,15	8,16	墓参り
7,16	8,17	盆船流し
8,15	9,15	八幡様の祭礼 月見（15夜）
8,17	**9,17**	**運動会**
8,23	**9,23**	**彼岸の中日 運動会**
9,8	10,7	かんづきだんご
9,9	10,8	運動会（鹿折小學校）
9,14	10,13	大浦のオドリコ　芝居
9,16	10,15	16日（旧）のまんじゅう
9,29	10,28	旧の29日（おかりあげ） 羽田神社の祭礼
10,6	**11,3**	**明治節**
11,11	12,18	新年の準備

7,7	8,27	お墓はらい お茶たて 灯篭たて
8,4	**9,23**	**彼岸の中日 運動会**
8,15	10,4	八幡様の祭礼 月見（15夜）
8,18	**10,7**	**運動会（鹿折小學校）（中止）**
9,15	11,2	神楽見物
9,16	**11,3**	**明治節**
10,10	11,27	金比羅の祭典　神楽

されている。また1933年のススハキの前日には，「明日はすゝはきなので中間のたな等をかたじける」とも記されていた。ここで興味深いことは，ススハキに先立って，家人の間にも各々の役割があった点である。

ススハキの作業として，まず，「おしめなどをこしら」えていたとされる。この「おしめ」は「注連縄」のことを指している。もちろん掃除も行われた。33年には，神棚や仏壇などの掃除が行われた。新年を前に神仏に関わる場所を清浄にすることが，ススハキの重要な目的の一つとも考えられる。

夜になると「すゝはきもち」を食べたとある。名前がついているように，この日はモチをついて親族が共に食べていた。夕食後には，「鬼打つ豆」がまかれた。資料③によると仁屋では，「オガミから外へ向かって，「天打ち，地打ち，四方打ち，鬼は外，福は内，鬼の目玉ぶっ潰せ」と三回唱えながら豆をま」［川島 2014 8-9］いたとされる。オオイでの豆まきも仁屋が担当していたことが聞き取りからわかるので，唱え言もほぼ同じであったと考えられる。その意味づけは他地域の節分に行われる行事と内容的には変わらないようである。

次に「町の日」，そして，「年越し」が記されている。町の日は，旧の12月28日とされる。この日は，町で正月に入用なものを購入する日とされていた。32年の記述で町に出かけた家族が，「お母さんと竹代あねさん」であると記している部分は，現在，オオイからの聞き取られる内容と符合する。

年越しの記録は，後述する聞き取りと参与観察の内容に比べて簡潔である。32年には，木入れや掃除の他に「代へう」，「ほしのたま」を貼る作業に従事している。この他に，「おせいぼの人だち」がくるので，夕食を早く食べたとある。この暮れの慣行については，戦後早い時期の記録にも記されている。翌年は，行事の日程が1日ずれており，本来の行事とは異なる行事が行われている。この年はこの日に町に買い物に行くが，その時は，栄一氏の母親が1人で出かけている。これは，か

なりイレギュラーな形式であった可能性がある。おそらく，生業にさかれる人手との兼ね合いから，仕方のない判断だったと考えられる。

33年には「お松を仁屋のおどやをたのんでむかいた」とある。この松は，後述するように正月の松飾りに用いる松や注連縄に結わえる松の枝先，あるいは明神様や金比羅様といった小々汐の神々に供える松をさすと考えられる。

ちなみに33年の元旦に行われた「年越しの作業」では，「うしぬぐいのかわをとる」と記述されている。ここでの「うしぬぐい」という表記の内容は，近年の気仙沼市史などでは，「オシノグイ」と記述されるものに相当する。この行事には，松の若木の幹も用いるので，それらの素材を頼んだものと考えられる。

1932年と33年では記述にズレがあるが，元旦と正月に関連する行事として，オセイボや年始，お引き，寺参りなどの記述が登場する。次に示すのは，32年の元旦の記述である。

二月六日　土曜　晴　起＝六時半　寝＝八時十分
今日は旧の元旦元朝まいりに姉さんが行く。
私も近くにおまいりに行った。
朝学校に行かふ(ママ)として居ると桑唐（※入れ換え記号）
おぢさんたちは来た。學校に行ったら
大ぜい来て居た。ピンポンをしてあそぶ
十時から始まつ(ママ)て一時間家にいそいで
来たらおぢさんがごねんしに行った
といふ(ママ)ので私は行かない。（中略）
夕はんにはとろろをして食った。

興味深いのは，32年の元旦の記述として「元朝参り」という言葉が見られることである。元旦の早朝，1年の最初のお参りに，近隣の神社や小祠にお参りすることを指していた。ただし参る神様やその意味づけには記述ごとに差異があるため，検証が必要となる事例である。栄一氏が「近くにおまいり」に行ったということは，おそらく，小々汐内の小祠に向かったものと考えられる。対して「姉さん」の方は，❷で紹介されていたように小々汐外の神社や寺院にもお参りに行った可能性が高い。

翌年には，兄の忠行氏が寺参りに行き，次男である栄一氏は「小々汐中を廻る」とある。この寺参りは通年のものか，前年に祖父が亡くなったことと関連するのかは確定できない。小々汐を廻るというのは，おそらくオオイとしての「お年始」の挨拶を指すと考えられる。また，行事食として，元旦の夜に「とろろをして食った」とある。長芋のトロロのことであり，正月の儀礼食の一つである。この他にもオオイでは，三ヶ日に食べるものがほぼ決まっていた。

次に正月2日になるとに2ケ年とも餅を食べたとある。その後，1932年の記事には「おひき」をもらったと記されている。おひきは駄賃に当たる意味だが，ここでは「年玉」にあたるものだろう。

3日になると特に注目すべき事柄は，両年ともに記されていない。ただ1932年には，「夕はんす

ぎにろにあたつて(ママ)色々の話をした」と記されている。誰と話をしたのかもわからないが，このような場で，様々な伝承や昔話が語られた可能性もある。ちなみに「年始」に関しては三ケ日が終わっても記載があり，「年始」の意味にも注意が必要とされる。

7日には「七草粥」と「お天王様参り」が記されるが，行事の具体的な内容は記されていない。32年の日記には，「七草のおかゆを食って學校に行く」と書かれている。33年には，「今朝早くおきてたくばの天王さまにおまいり」に行ったと記している。32年の早朝のお参りも「天王さま」を訪れたと考えてよさそうである。「たくばの天王さま」は，同じ小々汐内でも，オオイの家からは南へ丘を一つ越えていった所に位置する小祠である。かつてタクバには，オオイの旧邸があったと伝承されている。そのため年末，年始には，このタクバにもお参りやお供えが行われていた。

11日は，ノウハタデである。32年には「今日は農畑デーなので朝一時頃から外の家の人たちが来て「もどつ」をこしらへました」とある。また，翌年には，「今日はのうはだでいだ。朝ねて居ると仁屋のおどやは来ておこした。五時少し前であった。それがら(ママ)皆集った。僕は五時半頃におきた。もちやきをする。」と記されている。

この行事はかなり早い時間から始められたようで，32年には，朝1時頃と記されている。未明というよりは深夜である。翌年は，午前5時少し前に仁屋に起こされたとあるが，すでに別家の者たちは，オオイで作業をしていた可能性が高い。行事に栄一少年自身はあまり参加していない。どうやらこの行事の中心は，「「もどつ」をこしらへ」ることにあったようである。これは仁屋の報告にある「モトヅ（元綱）」と同一のものだろう［川島 2014 25］。また33年には，朝方にモチヤキをしたとあるので，栄一氏が起こされたのは，この餅を朝食として一緒に食べるためだったのかもしれない。

興味深いのは文字の当て方である。32年には，「農畑デー」と記し，33年には，「のうはだでい」と表記している。前者は，デーが英語のDAYを表しているかに見える表記であるが，その意図はよくわからない。当時10代半ばであった栄一氏が，この日の行事内容やその意味づけを踏まえて字を当てたものだろう(6)。

小正月の前後にも多くの行事が記されている。アワボヘイボ，歌い込み，ナマコドリなどいずれも栄一氏やその兄弟が関わる行事が記されている。また，他の行事と同様に小正月の前日から準備作業が行われた。まず，両年に渡って記されている行事として，アワボヘイボ，すなわち「粟穂稗穂」の準備がある。アワボヘイボは，カツノキ（ヌルデ）の木を30センチほどにきり，皮を削らないものをアワ，削ったものをヒエと称して，6本ずつ12本を飾る。これらは，切ってきた栗の木に竹を通して吊り下げていた。

33年には，「明日あわぼへいぼをならすので切る」とある。この若木は，「粟穂稗穂」を成らせるための木であるが，「ノコボラから切る」とある。おそらく，小々汐内の地名だろうが，正確な場所は判明していない。また，32年では，「今日は旧では，十五日なので早くおきてお松をおさめたり「あわぼへいぼ」を作らうと思っておきたらお母さんが其の仕事をしてしまつた(ママ)」と記されている。

ちなみにこの日には「まつはな。明神社のお松をおさめた」とも記されている。「まつはな」は小々汐内の屋号を示し，転じてその近くに祀られている金毘羅の碑をさす。明神社は，オオイの家の裏手にある小祠である。いずれの場所の正月飾りも，この日に収められたことがわかる。

また，この夜には，「うたひこみ」が行われていた。資料②，③で紹介されていたように小々汐の集落内を，子どもたちが大漁祈願の唄を歌ってまわる行事である。栄一氏は，弟の知行氏が歌ってまわる様子を「見てあるいた」と記しており，自身は参加していなかったことになる。翌年も，弟の参加が記されているのみで，自身が参加したとは書いていない。これは個人的な性格というより，歌い込みに参加する年齢に一定の上限があったと捉えた方がよいかもしれない。そのおおよその上限は，兄弟の歳の差から考えて，12 歳前後ではないだろうか。

最後に 33 年には，栄一氏と知行氏が「なまこひっぱりをした」と記されている。文字通りナマコにワラヒモをつないで引っ張っていく行事である（ナマコをワラで巻いて小さな俵のような形にする地域もある）。家に来てから行ったと記されているので，オオイ個別の家の行事として行われたと考えられる。

翌日の 16 日，2 年間の記述に共通する行事は見当たらない。資料①の報告のなかに，この日についての記述がなければ，見落とす可能性が高かっただろう。この日については，より詳細な内容を持つ資料②や③にも見当たらない。その意味でこの日の行事を日記からサルベージできたことも重要である。

まず，32 年には，ただ 1行「「おししや様」おがみが来た」と記されている。これは，どうやらオシラ様と考えられる。オシラ様について栄一氏自身は，いかなる活動も記していない。他方で，翌年の 33 年になると，「今日はお寺まいり」と記している。朝食に餅を食べたあと，友人たちとお参りに行ったとあるので，個人や家ではなく，小々汐の行事と捉えるべきである。また，このお寺は他の事例や聞き取りから考えて，鹿折地区にある興福寺であると考えられる。興福寺は曹洞宗の寺院で小々汐のほぼ全ての家が門徒となっている。

両年ともに 1 月 20 日にエビス講が行われている。エビス講は，「えべすこ」，「エベシコ」と表記されている。32 年には，「今夜は二十日でえべすこなので いそがしい。夕はんすぎに大ぜいの人が来た。」と記されている。簡潔な記述であるが，両年ともに，オオイに多くの人が集まったと記されていることが注目される。この日については，他の資料にはほとんど記載がない。ただし資料③では，この 20 日が「「初エビス」の日でもあるので，「エビスコ振る舞い」もした」［川島 2014：30］と記されている。どうやらこの行事は，オオイが沿岸漁業やノリ，カキ養殖を行なっていた時期に，漁に携わる別家の者を招いて行なっていたようである。そのため，戦後になると生業の変化とともに下火になっていったと考えられる。

3 月 3 日は桃の節句の行事が記されている。桃の節句は，32 年度の日記にしか記されていない。33 年は，旧 3 月 3 日の約一月前（1933 年 3 月 4 日）に起きた昭和の大津波の余波で，行事そのものが自粛されたと考えるのが妥当だろう。通年の行事と考えられる 32 年は，どのように行われたのだろうか。日誌によれば，最初に餅つきが行われている。節句の餅については，次章の資料によって補足される内容がある。次に栄一氏たちは，神明様の大漁祭りを見物にいった様子が記されている。神明様は小々汐を含めた四ヶ浜には見当たらない。おそらくこれは，内湾地区の五十鈴神社のことだと考えられる。この神社での大漁祭りに「おどり」が奉納されたので，兄と一緒に船で出かけた。行事は午前中に行われていたようである。午後になって家に戻ると「ごせっくいわい」の人がきていた。桃の節句にもオオイに人が訪れていたことが確認できる。これらの記述は，資料①の

記述と符合する。

32年，33年ともに3月16日には「十六日まんじゅう」についての記述がある。これは資料②の「ノウヅラダンゴ」，③の「農ヅラ様」に対応するもので，対になる行事が9月16日に行われている。この「まんじゅう」を栄一氏は気に入っていたようで，「大変にうまい」と何度も記している。

5月になると端午の節句が行われる。5月の節句は32年と33年の両年に渡って記されている。両者でほぼ共通の行事が記されているが，32年の方がやや詳細な記述となっている。

六月七日　火曜　××雨　起＝五時五十分　寝＝九時
・・・ひるすぎには大へん強く雨は
ふつ(ママ)て来た。よもぎをかった。ふろに火をも
した。しやうぶてやねをふいた。明日五せっく
しやうふゆ(ママ)なので皆入つた。もちをついた。
六月八日　水曜　曇後→雨　起＝六時　寝＝八時半
今日は旧の××五日で五せつくだ。朝よりもち
つきだ。かほをあらつて(ママ)おまいりをした。
かすつきを始めた。五せっくれいおする(ママ)人は大ぜい
来る。前林のべつかの男の人はもちさけたん
もの等を持つて(ママ)来た。とう×おぢさんも来た。

端午の節句の前日には，毎年，ショウブによる屋根葺きの作業が行われる。32年の節句日の前日には，家族全員が菖蒲湯に入ったことも記されている。気になるのは「ヨモギをかった」と言う表現である。「刈った」のか「買った」のかは前後の文脈では判然としないが，おそらく前者だろう。翌日の5日（旧暦）の日には，両年でお参りをすると記されている。ただし，どこにお参りが行われたのか明確ではない。この端午の節句にも，餅つきが行われた。いわゆるカシワ餅のことである。なお32年の日誌には，祝いの人々が多く訪れたと記されており，祝いの品を持参した人もいた。「もちさけたんもの」とは，餅・酒・反物のことだろうか。また，33年には，便船に乗って芝居見物に行ったとも記されている。

桃の節句や端午の節句に多くの来客があったことは，資料①の記述と符合する。逆にそれ以後の記述にあまり語られていないことに注意が必要である。このことと関連して想起されるのは，資料②で，「本家に参集する機会は極めて多く，この習慣は戦後もひきつづき守られてきたわけであるが，現在では，これらのうち大晦日・元旦・盆に関係する行事に限定するように現当主が指導している」［東北歴史資料館編 1984：106］と記されていることである。ここで記された現当主とは，現在の当主である尾形健氏の父，忠之氏のことである。また川島も資料③で「オオイが，戦後の生活改善運動に関わり，行事や慣例の簡素化を率先して実行する立場にあった」［川島 2014：3-4］と述べている。これらの記述からは，戦後の社会変動や価値観の変容とともに，当事者たちの意思で行事の内容に大きな変化が生じてきた可能性を指摘できるだろう。

6月14日は，タクバのお天王様へのお参りがある。この日にはコウセンが食べられた。33年の

日記によれば，6 月 14 日から天王様の掃除が行われている。家族のなかには，この日にお参りに行く者もいた。栄一氏は 15 日の朝早くにお参りに行っている。32 年の記述では,「御天のう様なのでおはたを持って行く」とある。当時はこの小祠にも，祭日にハタを立てていたことがわかる。さらに天王様には,「おようごもり」が大勢来ていたとも記されている。小々汐の複数の家からお参りがあったようである。

七夕は旧暦の 7 月 4 日から準備が始まっている。この日に, 七夕のための紙を購入し, それを切ったと記している。翌日の 5 日には，さらに紙を切ったうえで,「かみより」をよった。これは紙を七夕の竹に結わえるためのものだろう。6 日になっても紙を切る作業は続き，その日の昼ごろにようやく完了したようである。また，作業の一環で，カキダレも製作している。午後になると七夕用の竹を切っている。おそらく，家の裏手の山に自生している竹を用いたものと考えられる。切ってきた竹を家に吊るし，フサナガシもつけている【写真 3】。

翌日，七夕様と呼ばれる竹飾りは朝食後に流した。資料③の仁屋の記述を参照するなら，小々汐の海に流したものと考えられる。この日には，地区の道路と墓地の清掃があったことも記されている。

7 月 13 日からは盆の行事が始まる。残念ながら盆についての記述は, 32 年の日記にしか記されていない。33 年は 9 月 2 日（旧暦 7 月 13 日）に「此の間，忙しいので（日記を）つけません」と記され，1週間ほどの空白がある。この前年に栄一氏にとっての祖父，貞七氏が逝去され，この年が初盆であった。そのため様々な行事が行われていたことが推測される。その時期の営みが日誌に記されていたなら，非常に貴重な記録となっていただろう。

さて，7 月 13 日は「町の日」とされ，栄一氏とその母，さらに祖父も市内に買い物に出ている。資料④の「盆マチ」に相当する慣行が一家の行事として行われていたわけである。買い物は,「せんこう花火」しか書かれていないが, それ以外に盆で入り用な品々を購入したと考えられる。「家に帰ると「たな」を作った」とある。これは，ナカマに作る盆棚のことである。14 日になると,「せなかではっとう」を食べた。これは特異な形状のハットウ（スイトン）で，震災前までオオイでも作られていた。

15 日になると天候が悪いなかで，墓参りが行われた。「船で行く」とあるので，これは小々汐の共同墓地のことである。共同墓地は, オオイのある小々汐の谷から南に丘を一つ越えて, さらに小さな谷を挟んだ丘の上に位置する。その丘越えの道が雨でぬかるんでいたため, 海沿いに船で移動したということだろう。それでも，共同墓地がある丘までの道は,「大へんぬかった」ようである。この夜には「せんかう花火等」をしたと記されているが, これは単なる娯楽ではないかもしれない。

写真３　1980年代の仁屋での七夕飾り（撮影：川島秀一）

この点については③の仁屋の事例が参考になる。16日は,「ぼん船をながした」という記述のみが,盆に関連する行事である。この簡潔な記述からは，しかし，当時はオオイでも盆舟を海に流していたことが確認できる。(7)

8月15日は2年間ともに，二つの行事が記されている。一つは「村社八幡神社の祭典」であり，もう一つは,「お名月」である。八幡神社は，当時，小々汐を含めた鹿折村の村社であり，祭りの際には地区全域の神輿の渡御（おさがりと呼ぶ）が行われていた。小々汐でも祭典では，神輿の到来が大きなイベントであった。32年には,「今年は會館の前（仁屋のこやのわき）にやしんだ」とあり，33年には,「十一時にみこしは来た。今年は山根の前で休む」と記されている。「会館の前」や「山根の前」は，いずれも小々汐内での休憩場所をさしている。具体的な行事の内容はわからないが，村社という規模からも，小々汐全体に関わる行事であったことは間違いない。2番目の「お名月」の行事はオオイという家単位で行われたものと考えられる。32年の記述では,「豆，小豆，やこめ等をわけて皆で食べる」と記されている。この「やこめ」は仁屋についての資料や気仙沼市史から「焼米」であることがわかる。新米を籾のまま煎り，殻をついて外したもので，その年の収穫を祝う意味があったのだろう。他の大豆や小豆とともに儀礼食としての意味合いが強いと考えられる。

なお,8月で興味深いのは,彼岸の中日である。彼岸の中日は新暦の9月23日に固定されており,同時に地区青年団の運動会の日に定められていたようである。

9月には29日に「お刈り上げ」という表現があり,休み日であったとも記されている。この日は,同時に羽田神社の祭礼の日でもあった。お刈り上げは，後でみるように収穫を祝う日であったが,日記からは行事や特別な行事は確認できない。しかし，この日に餅つきをして食べたとあり，お刈り上げの行事食と捉えることもできる。「羽田神社の祭典」について栄一氏は,「むかひおどもに行く」と記している。「本町橋」まで行ったとあるが，どのようなルートで移動したのかはわからない。しかし,「むかひおども」という表現からも，近くの御旅所まで出向いて神輿を迎え，一定の距離をお供して歩いたのではないだろうか。

そして33年の10月10日には,金毘羅様の祭礼が記録されている。金比羅様は,小々汐内の松鼻という家の近くにあった金比羅碑での祭りである。この時には神楽が演じられた。当日は雨が降っていたが天気は好天に向かい，舞台を設えて昼過ぎから神楽が奏されて夜の11時過ぎまで続いたとある。

以上のように，この日記には，ほぼ1年間の行事が示されていることがわかる。行事の中には,現在の聞き取りから伺えないものもあった。例えば七夕行事は，資料②によれば「男の子どもたちがそれぞれ2～3人ずつの仲間組で」［東北歴史資料館編 1984：113］活動していた。日記でも七夕の行事は，7月の4日の材料の購入から記されている。おそらく，戦中か戦後の早い時期に休止された行事が，日記資料から確認できたことで，オオイを含めた小々汐の年中行事の広がりを再検証するのに有効だろう。

もっとも日記の記述は非常に簡潔で，行事の内容や手順が記されることはほとんどない。

よく言われることだが，行事の当事者にとって当たり前のことは，わざわざ記録されることは少ない。あるいは，行事の存在は分かっていても，行事を執行する立場になければ，具体的な内容を記述することはむつかしいこともある。(8) 日記の時代も，行事を執行するのが家長であったり，女性たちで

あったりした場合に，当時，まだ10代半ばの著者が，詳細な内容を記せないのも無理はないだろう。

むしろ，このことはこの日記の記述として重要な点かもしれない。すなわち，ここで記された行事は，当時10代半ばだった栄一少年（とその兄弟）の視点から記されているということである。行事の中には，栄一氏たちが中心的な役割を担うものと，副次的な立場に止まるものがあった。それらは記述の軽重にも現れており，家や地域における行事の分担についても理解が進むだろう。例えば，ススハキなどのように本来の行事のさらに下準備に当たる段階で，家内の者の関与が付帯的に記されている点でも，この日記の記述は貴重である。

おわりに

本研究は，特定地域の複数の資料を用いて年中行事の多様な側面を記述し，行事の継起的な変化を示す民俗誌の再構成を目的とした。そのため本稿では，民俗誌の記述を並列化するために必要な行程を整理した。今後の議論では，より多くの資料を重ね合わせることで，年中行事の変遷過程を明らかにしていきたいと考える。もっとも，異なる性質の資料を付加する場合には，さらなる工程が必要になるかもしれない。その意味でここでの議論は，民俗文化の総合的なアーカイブ化のための試論に過ぎない[(9)]。

また，本論では，もう一つ重要な点について紹介する余裕がなかった。それは，現在の聞き取りによる資料の意味とその接合に際して必要な作業の見取り図である。実際，最も重要な着地点は，現在形で語られる聞き取りと過去の資料をいかにして切り結ぶのかという点にある。以前の論考において，断片的に日記資料と現在の聞き取りを結びつけて議論を行ったことはある［小池・川村 2014］。しかし，本論で見たように一次資料以外にも，参照すべき資料は数多く存在している。そこから得られる情報を過不足なく統合して初めて，研究者の営みを正統に意味づけ，地域社会へと送り返す道筋が開けるはずである。

年中行事を含めた民俗文化の歴史的な意義だけでなく，現在から未来に向けての行事の意味や価値を投企するための仕掛けがここで必要とされている。

註

（1）――2011年11月までに，小々汐の尾形家住宅でおよそ二万点の生活用具・文書を回収し，保存処理を行ったうえで市内において管理している。

（2）――これ以外の仁屋に独特の報告として冬至の日には「明るい色の「カボチャ粥」を食べる」とも紹介されている。

（3）――小池は次のように述べている。「レスキュー現場においては震災前の民俗学的な聞き書きでは話題にならなかった生活用具や生活用品の発見があり，それらの記録史料との照合の可能性が見通せるようになりつつある。あるいは震災とそれに続く津波に際して小々汐地区の人々がとった行動やその理由についても地域の伝承との関わりで検討すべき点が少なくない。また集落が津波によって失われたことで，集落形成以前の様相や景観をうかがうことも可能である。これらは震災とレスキュー事業を経て，気仙沼の民俗を考えていく新たな課題ということができる。」［小池 2013:182］

（4）――このように他地域で行われる行事に小々汐の者が参加している事例は他にも見られる。唐桑の御崎神社の祭礼の事例などもその一つである。

（5）――これらの検証から行事の分類には，より大きな問題が潜んでいることがわかる。すなわち，年中行事という民俗学において非常にポピュラーな範疇，大分類と呼んでもいい範疇は，果たして明確に定義しうるものな

のかという点である。

（6）――『気仙沼市史』の民俗編では，「農ハダデ」と漢字と仮名で記されている。年が明けて初めて農作業を行う日であると解釈されている［気仙沼市史編さん委員会編 1994:198］。

（7）――これは，後述の現在の行事次第とは異なる。震災前には盆船は，海ではなく墓地で燃やされていた。

（8）――近年の行事内容をうかがう時も，当主の健氏がうろ覚えであったり，覚えていないことを，奥さんが覚えていたりすることもある。

（9）――四半世紀以上前に年中行事のデータベースについて論じた松本と古家は，民俗語彙の地域ごとのズレや命名の仕方のズレの問題，あるいは報告書における行事が実施された年代の曖昧さなど，本論と同様の課題を指摘している［松本・古家 1990］。

参考文献

相沢卓郎・齋藤良治・土取俊輝・梅屋潔　2013「気仙沼市における無形民俗文化財の調査記録(1)」『地域構想学研究教育報告』4,pp.22-40

梅屋潔　2014「その年も，「お年とり」は行われた―気仙沼市鹿折地区浪板および小々汐の年越し行事にみる「祈り」」『無形文化が被災するということ―東日本大震災と宮城県沿岸部地域社会の民俗誌』新泉社，pp.16-28

折口信夫「年中行事」

川島秀一　2014『小々汐仁屋の年中行事』東北芸術工科大学 東北文化研究センター

気仙沼市市史編さん委員会編　1994『気仙沼市史Ⅶ 民俗・宗教編』気仙沼市市史編さん委員会

小池淳一　2013「東日本大震災と文化資源―気仙沼市小々汐地区から―」『国立歴史民俗博物館研究報告』183,pp.169-186

小池淳一・川村清志　2015（共著）「文化財レスキューと生活文化の再創造―気仙沼小々汐オオイの事例から」木部暢子編『災害に学ぶ―文化資源の保全と再生』pp.145-174, 勉誠出版 , 2015年3月

竹内利美　1959『漁村と新生活―気仙沼湾地区基礎調査―』気仙沼市教育委員会

東北歴史資料館編　1984『三陸沿岸の漁業と漁業習俗 東北歴史資料館史料集 一〇』

松本浩一・古家信平　1990「民俗資料のデータベース化の試み―年中行事資料を中心として―」

柳田国男　1999「民間暦小考」『柳田國男全集』20巻，筑摩書房

川村清志（国立歴史民俗博物館研究部）
葉山 茂（国立歴史民俗博物館研究部）

（2017年12月18日受付，2018年3月30日審査終了）

Creating a Basis for a Dynamic Grasp of Annual Events: For Organizing Multiple Resources by Hierarchy and Concurrency

KAWAMURA Kiyoshi and HAYAMA Shigeru

This report uses a diary resource found in cultural asset rescue as a starting point to present the procedures necessary for reconstituting chronological descriptions of folk culture using multiple resources. Below, the intent is to compare multiple documented resources of a specific area to facilitate the organization of data by hierarchy and concurrency while understanding the attributes of each resource.

Annual events on a large scale such as municipalities and prefectures have been recognized, with data on annual events having been accumulated in reports of local museums and resource centers or in records at the local government level. This kind of resource, collected in a certain region over a certain time, gains significance only when compared to or related to other resources. There should be a discussion for the comprehensive use of the great amount of data accumulated in each area. However, simply laying out those resources next to each other will not necessarily lead to an overall grasp of annual events.

This is because various biases or variation in the degree of detail can be seen among these resources, depending on the compiler's objective or interest or the scope of investigation. For this reason, this report examines the case of the survey report of annual events in the Kogoshio region of Kesennuma City, Miyagi Prefecture, presents the issues encountered in arranging data by concurrency and hierarchy to account for the biases among reports, and provides a concrete example of the work process. The data obtained from this work will become a basic resource of the sequential change process of the folk culture of the area. It is also vital as a resource to inspect the degree of changes in folk culture, the facts of specific changes, and the various factors which induce change.

Key words: annual events, diary resources, folklore documentation, cultural asset rescue, concurrency, hierarchy